石見銀山

Iwami Ginzan Silver Mine Site

＿ 昆布山谷地区　妙本寺上墓地Ｅ地点・Ｇ地点 ＿
虎岸寺跡の石造物調査

平成28(2016)年３月

島根県教育委員会・大田市教育委員会

序

島根県と大田市は、平成９年から石見銀山遺跡について発掘調査や文献調査など総合的な調査を行っています。こうした調査成果は、平成19年度に、「石見銀山遺跡とその文化的景観」の世界遺産登録として実を結びました。そして、登録後もその歴史的な位置づけをより一層明らかにするため、調査を継続しているところであります。石造物調査もこの総合調査の一環として当初から取り組んでいるものであり、これまでに銀山400年の歴史の一端を明らかにしてきました。

本書は、平成27年度に実施した、石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地と虎岸寺跡における石造物調査の成果を報告するものです。

昆布山谷地区は、戦国時代から明治時代にかけて鉱山開発や集落形成がなされたと考えられ、石見銀山の開発初期から江戸時代にかけての盛衰、近代の再開発までの歴史を知る上で重要な地点です。

妙本寺上墓地は、昆布山谷地区では最も広範囲で、かつ多数の石造物が分布する墓地です。今回の調査では、石見銀山の最盛期にあたる江戸時代初頭の墓石群や、鉱山の守り神を祀った佐毘売山神社の社家の墓所などが確認されました。また、虎岸寺跡では、江戸時代中期から明治時代にかけて墓地が営まれており、地役人らによって建てられた石塔が確認されました。これらの調査成果は石見銀山の歴史や信仰のあり方を物語るもので、今後の調査研究の基礎資料となるものです。

最後に、この調査に際して御協力いただきました関係各位に厚くお礼を申し上げますとともに、本書を今後の調査研究のみならず、遺跡の保護や整備活用、さらに歴史学習において広く活用していただければ幸いです。

平成28年３月

島根県教育委員会

教育長　鴨　木　　朗

例　　言

1．本書は、石見銀山遺跡総合調査の一環として実施した石造物調査の報告書である。

2．調査した場所は以下のとおりである。

昆布山谷地区　妙本寺上墓地E地点（大田市大森町ホ363-1）
妙本寺上墓地G地点（大田市大森町ホ363-2）
虎岸寺跡（大田市大森町ニ274、ホ390外）

3．調査は次の組織で実施した。

石見銀山遺跡調査専門委員会

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）
大橋泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部　昭（元島根県教育委員会教育次長）
黒田乃生（筑波大学大学院人間総合科学研究科教授）
田辺征夫（公益財団法人大阪府文化財センター理事長）
中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野義文（石見銀山資料館館長）
原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校教授）
村上　隆（京都美術工芸大学教授）

事務局（平成27年度　島根県教育委員会文化財課）

丹羽野裕（文化財課長）　小塚誠治（世界遺産室長）
熱田貴保（同主席研究員）　内田克己（同企画員）　田原淳史（同企画員）
東山信治（同専門研究員）　矢野健太郎（同主任研究員）　難波正憲（主任）
小杉紗友美（同嘱託職員）

石造物調査指導者

田中義昭（元島根県文化財保護審議会委員）
池上　悟（立正大学文学部教授）

調査参加者

現地調査

（調査指導者）　田中義昭、池上　悟
（立正大学院生）　足立佳代、玉城雄一
（島根県教育委員会）　熱田貴保、東山信治、矢野健太郎、小杉紗友美
（大田市教育委員会）　中田健一（石見銀山課長補佐）、山手貴生（同副主任）
矢部俊一（同技師）、渡邊良介（同主事）、
西尾克己、新川　隆、尾村　勝（同嘱託）

4．実測図・写真・拓本等は石見銀山世界遺産センター（大田市大森町イ1597-3）において保管している。

5．本書の執筆・編集は東山が行った。

6．図版１の史料の掲載について、木曽重美氏よりご許可をいただいた。記して感謝申し上げる。

凡　　例

・第３表には、石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地Ｅ地点・Ｇ地点及び虎岸寺跡の石造物を掲載した。
・各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を（　）内に記載した。
・複数部材からなる石造物の高さは、上の部材の高さ＋下の部材の高さ、最大幅は、上の部材の最大幅／下の部材最大幅、と記載した。
・銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面）…　右面）…　と記載している。
・銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は［　］で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は　（上欠)]、[　（下欠）と示した。また推定できる文字は□の後に（　カ）と表示した。
・戒名及び名字は基本的に伏字で○○とした。
・実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
・写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

本　文　目　次

第１章　調査の目的・対象・経緯 …… 1
　第１節　調査の目的 …… 1
　第２節　調査の対象 …… 1
　第３節　調査の経緯 …… 1
第２章　石見銀山遺跡の位置と歴史 …… 4
　第１節　石見銀山の位置と地質学的背景 …… 4
　第２節　石見銀山の歴史的背景 …… 4
第３章　調査の概要 …… 6
　第１節　調査の経過 …… 6
　第２節　調査の方法 …… 6
　第３節　昆布山谷地区及びその寺院・墓地の概要 …… 6
第４章　妙本寺上墓地E地点の調査 …… 10
　第１節　墓地の立地と石造物の分布 …… 10
　第２節　石造物の様相 …… 10
　第３節　まとめ …… 15
第５章　妙本寺上墓地G地点の調査 …… 26
　第１節　墓地の立地と石造物の分布 …… 26
　第２節　石造物の様相 …… 27
　第３節　まとめ …… 28
第６章　虎岸寺跡の調査 …… 30
　第１節　墓地の立地と石造物の分布 …… 30
　第２節　石造物の様相 …… 30
　第３節　まとめ …… 32

挿　図　目　次

第１図　石見銀山遺跡全体図 …… 3
第２図　石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図 …… 5
第３図　昆布山谷地区周辺図 …… 7
第４図　妙本寺上墓地E地点周辺図 …… 11
第５図　妙本寺上墓地E地点石造物分布図 …… 11
第６図　組合せ宝篋印塔復元想定図 …… 14
第７図　妙本寺上墓地E地点の年代別石造物造立状況 …… 15
第８図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（１） …… 17
第９図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（２） …… 18
第10図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（３） …… 19
第11図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（４） …… 20
第12図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（５） …… 21
第13図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（６） …… 22
第14図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（７） …… 23

第15図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（８） …… 24
第16図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（９） …… 25
第17図　妙本寺上墓地G地点石造物分布図 …… 26
第18図　妙本寺上墓地G地点 二石宝篋印塔 …… 27
第19図　妙本寺上墓地G地点の年代別石造物造立状況 …… 29
第20図　虎岸寺跡石造物分布図 …… 31
第21図　虎岸寺跡の年代別石造物造立状況 …… 32

表　目　次

第１表　妙本寺上墓地Ｅ地点 組合せ宝篋印塔分類表…… 12
第２表　組合せ宝篋印塔基礎の高さ・幅比率 …… 13
第３表　石造物一覧表 …… 33

写真図版目次

図版１　明治４（1871）年の銀山町社寺絵図面（木曽重美氏所蔵、一部抜粋）
図版２　妙本寺上墓地E地点北側近景
　　妙本寺上墓地E地点中段斜面・下段平坦面（北東から）
図版３　妙本寺上墓地E地点中段斜面・下段平坦面（南西から）
　　妙本寺上墓地E地点石積み基壇
図版４　妙本寺上墓地E地点石造物（１）
図版５　妙本寺上墓地E地点石造物（２）
図版６　妙本寺上墓地E地点石造物（３）
図版７　妙本寺上墓地E地点石造物（４）
図版８　妙本寺上墓地E地点石造物（５）
図版９　妙本寺上墓地G地点（東から）
　　妙本寺上墓地G地点（南から）
図版10　妙本寺上墓地G地点　本城家墓所
　　妙本寺上墓地G地点　二石宝篋印塔
図版11　虎岸寺跡　境内東側墓地
　　虎岸寺跡　石塔基壇周辺
図版12　虎岸寺跡石造物

第１章 調査の目的・対象・経緯

第１節　調査の目的

石見銀山遺跡は中世から近世（特に戦国時代から近世初頭)、さらには近代へと長期間にわたって形成された遺跡である。石見銀山遺跡では開発から閉山に至るまでに、繁栄期・停滞期・衰退期・近代復興期のあったことが明らかになってきているが、この歴史過程を遺物や遺構といった考古学的事実に即して詳細に明らかにするとともに、さまざまな側面から鉱山遺跡としての特性を把握することにより、石見銀山の実態に迫ることが求められている。

本遺跡における石造物調査は、銀山の開発に関わった人々の信仰や葬送儀礼、社会の営みとその変遷の一端を明らかにすることを目的として実施している。

第２節　調査の対象

一概に石造物といっても①墓碑、石塔、石仏などの信仰関連石造物、②石臼や要石などの生産関連石造物、③街道沿いの道標などの交通関連石造物、④石切り場など生産地・流通関連石造物、など多種多様なものが認められる。それら全てが石造物調査の対象となることは言うまでもないことであるが、現実には限られた時間・人員等の制約も多く、全てを調査することは困難である。

したがって、本石造物調査においては、上記の４つの区分のうち、埋葬関係の遺構群・遺物群の様相、すなわち墓地とそれを構成する墓石が、銀山の操業に直接または間接的に関わった武士・鉱夫・職人・商工業者とその家族等の存在ぶりを具体的に物語る資料であり、鉱山の盛衰（人口の増減等）をより直接的に反映するものと考えられることから、①の信仰関連石造物を主な対象として重点的に調査を実施し、先に挙げた目的に迫ることとしている。

第３節　調査の経緯

石造物（墓石）調査は、島根県教育委員会が石見銀山遺跡総合整備計画策定のため、昭和60年度に徳善寺跡などで、天正から慶長年間の紀年銘石塔を中心に一部の確認調査を実施したことが発端となっている。

平成９・10年度には石見銀山遺跡総合調査の一環として石造物調査が実施されることとなり、仙ノ山山頂周辺の石銀地区と龍源寺間歩上・妙本寺上墓地の調査が実施された。この調査では、石造物のグルーピングを心がけ、各群の規模と石造物の種類、あるいはその消長を押えるため、紀年銘を持つ墓石の調査が重点的に進められた。墓石調査地の選定を発掘調査と連携した結果、天正や文禄年間の紀年銘のある墓石が発見され、古い墓石の存在する地区は生活していた時期も古い可能性が高いことが明らかになり、発掘調査箇所の選定にも有効であることが判明した。

こうした石造物調査の有効性が確認されたことから、調査の継続と計画の必要性が、石見銀山遺跡発掘調査委員会により指摘され、平成11年度からは以下の３つの調査を総合的に行うこととなった。

①鉱山全体の石造物の傾向や変遷を把握し、悉皆調査の必要箇所について判断材料を得るための分布調査。

②特徴的な墓地の構造や変遷を把握するために行う悉皆調査。

③発掘調査等で得られた成果と関連付けるため、発掘調査地周辺の石造物やその他の資料について関連調査。

これら３つの調査のうち悉皆調査については、①銀山地区・大森地区に位置する、②群としてのまとまりが明確に把握できる、③アクセスが容易である、④調査環境が比較的よいなどの条件を満たした墓地のうち、重点的に本遺跡の最盛期と言われている戦国時代から江戸時代前半の墓地を選

び、継続的に調査する計画をたてた。

この方針に基づき、石造物調査は平成11年度から分布調査・悉皆調査・関連調査の組み合わせによって行われるようになり、妙正寺跡の悉皆調査を皮切りに6箇所の寺院墓地を中心とする悉皆調査、及び銀山柵内・大森地区の分布調査が実施された。これらの調査成果については、既に報告書が刊行されている。

平成16年度にはそれまでの調査成果をまとめ、検討を加えた報告書も刊行され、銀山柵内・大森地区における石造物調査は一定の成果を得るに至っている。

その後、平成17年度からは港や街道など周辺部における石造物の実態を把握するため、温泉津地区における調査が開始されることとなり、これまでに恵珖寺、西念寺、金剛院、極楽寺の悉皆的調査と分布調査が行われた。なお、温泉津地区での石造物調査は、温泉津伝統的建造物保存対策調査や港湾調査、街道調査の際に実施されている。

平成22～23年度は、平成9・10年度に分布調査を行っていた石銀地区の悉皆調査を実施した。石銀地区は石見銀山に於ける初期鉱山業の中心の一角であり、墓Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの悉皆調査を通して、奉行・代官墓にも匹敵する規模の石塔群が樹立されていることが判明した。

平成24年度は、平成24～25年度の落石防護柵設置予定地に本経寺墓地があり、多数の石造物が存在することが確認されたため、こちらの悉皆調査と試掘調査を実施した。

平成25年度は、栃畑谷地区の市道大森三久須線の治山事業対象地である字甚光院周辺に石造物がまとまって存在することが確認されたため緊急的に悉皆調査を実施した。

また、大谷地区の高橋家裏の要害山南麓では、自然災害防止事業の対象地内に石塔が数基確認されたため調査を行った。

落石対策事業等の緊急調査以外には、清水谷地区本法寺跡にある銀山町役人・門脇家墓所と下河原天満宮跡で調査を実施している。

平成26年度は、石銀地区の墓地・石造物の全容を明らかにするため、同地区で未調査であった、墓Ⅰ、墓Ⅱ東、墓Ⅲ東、墓Ⅳ、墓Ⅴの悉皆調査を行った。

また、栃畑谷地区字甚光院についても、平成25年度調査地に隣接しながらも未調査であった南東側斜面と南側平坦面で悉皆調査を行い、墓域全体での変遷を把握することができた。

平成27年度からは、大田市教育委員会によって発掘調査が進められている昆布山谷地区を調査対象とし、石造物の様相や墓地の年代を明らかにするとともに、同地区の変遷について検討する資料を得ることとした。当年度は、同地区で古い石造物が密集する妙本寺上墓地E地点の悉皆調査を行ったほか、妙本寺上墓地G地点や虎岸寺跡墓地において銘文の調査を実施した。

［参考文献］

1　島根県文化財愛護協会1986『石見銀山関連遺跡分布調査報告』

2　島根県教育委員会他1999「城跡調査・石造物調査・間歩調査編」『石見銀山』第3分冊

3　島根県教育委員会他1999「民俗調査・港湾調査・街道調査編」『石見銀山』第6分冊

4　温泉津町教育委員会1999『1999　温泉津』

5　島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書1―妙正寺―』

6　島根県教育委員会・大田市教育委員会2002『石見銀山遺跡石造物調査報告書2―龍昌寺跡―』

7　島根県教育委員会・大田市教育委員会2003『石見銀山遺跡石造物調査報告書3―安養寺・大安寺・大龍寺跡・奉行代官墓所外―』

8　島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書4―長楽寺跡・石見銀山附地役人墓地（河島家・宗岡家）―』

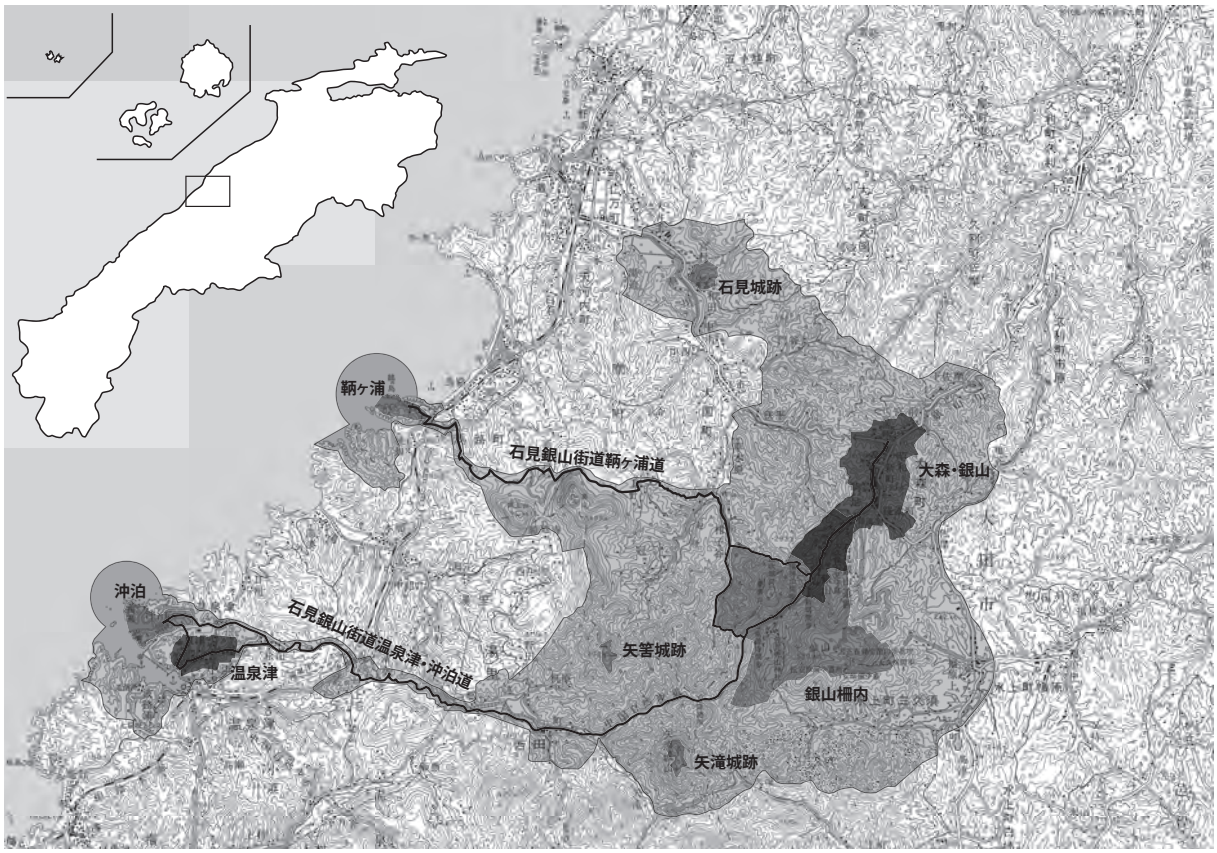
9　島根県教育委員会2004『石見銀山街道―鞆ヶ浦道・温泉津沖泊道調査報告書―』

10　島根県教育委員会2005『石見銀山街道―鞆ヶ浦・沖泊集落調査報告―』

11　島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書5―分布調査と墓石調査の成果―』

12　島根県教育委員会・大田市教育委員会2006『石見銀山遺

跡石造物調査報告書 6 ―温泉津地区恵珖寺墓所―』
13　島根県教育委員会・大田市教育委員会2007『石見銀山遺跡石造物調査報告書 7 ―温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(1) ―』
14　島根県教育委員会・大田市教育委員会2008『石見銀山遺跡石造物調査報告書 8 ―温泉津地区の石造物分布調査と西念寺墓地悉皆調査(2) ―』
15　島根県教育委員会・大田市教育委員会2009『石見銀山遺跡石造物調査報告書 9 ―西念寺墓地(3)・安原備中墓・大光寺墓地―』
16　大田市教育委員会2009『重要伝統的建造物群保存地区大田市温泉津伝統的建造物群保存地区　保存対策調査報告書(補訂版)』
17　島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10―金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物―』
18　島根県教育委員会・大田市教育委員会2011『石見銀山遺跡石造物調査報告書11―極楽寺墓地・温泉津沖泊道周辺の石造物・石銀地区―』
19　島根県教育委員会・大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡石造物調査報告書12―仙ノ山石銀地区墓Ⅲの調査―』
20　島根県教育委員会・大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡石造物調査報告書13―本経寺墓地の調査―』
21　島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14―栃畑谷地区字甚光院の石造物調査―』
22　島根県教育委員会2014『石見銀山―大谷地区 本経寺墓地発掘調査報告書―【山吹城南西麓の郭遺構の調査】』
23　島根県教育委員会・大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡石造物調査報告書15―石銀地区墓Ⅰ・墓Ⅱ東・墓Ⅲ東・墓Ⅳ・墓Ⅴの石造物調査―　―栃畑谷地区字甚光院の石造物調査―』



第１図　石見銀山遺跡全体図

第２章　石見銀山遺跡の位置と歴史

第１節　石見銀山の位置と地質学的背景

島根県は、日本海に面して東西約180㎞余りの長い県土を持ち、古代律令制以来の旧国単位では、「出雲」「石見」「隠岐」の３国からなる。石見銀山は、このうち「石見国」の東部、いわゆる「石東」といわれる地域に位置し、現在の行政区分では大田市に所在する。

石見地域では、江の川や周布川、高津川等の河口近くに若干の平野は広がるが、海岸部まで山地が迫っており、大規模な沖積平野は見られない。

石見銀山遺跡の中核をなす仙ノ山（標高538m）は、前期更新世（約100万年前）に火山活動をおこした大江高山火山群の北西部に位置している。大江高山、矢滝城山、葛子山、要害山、馬路高山などから構成されるこれらの山々は、「溶岩円頂丘」に分類され、粘性が高いデイサイトで山体が形成されている。

仙ノ山の鉱脈は、角礫火山岩やデイサイトの貫入岩体、凝灰角礫岩等を母岩とする。鉱脈には、鉱染鉱床の福石鉱床、鉱脈鉱床である永久鉱床という２つの鉱床がある。福石鉱床の鉱石鉱物としては自然銀、菱鉄鉱を主体として、黄銅鉱などの含銅硫化鉱物をほとんど含まない。また、永久鉱床の鉱石鉱物は黄銅鉱、黄鉄鉱を主体とし、輝銀鉱、自然銀、ビスマスなどが含まれる。

第２節　石見銀山の歴史的背景

石東地域では、近年、開発事業に伴って縄文・弥生時代の遺跡の調査例が増えている。大田市仁摩町の潮川流域にある古屋敷遺跡、五丁遺跡群、川向遺跡などで縄文時代後期以降の遺物・遺構が検出された。弥生時代～古墳時代の集落跡は、大田市鳥井南遺跡や仁摩町大国の庵寺遺跡で確認されている。庵寺遺跡と同所の庵寺古墳群は石見地方で有数の規模の古墳群である。

平安時代前半期の遺跡では、緑釉陶器が出土した仁摩町殿屋敷遺跡や円面硯が出土した大田市八石遺跡が注目される。これらの遺跡では中世前期の貿易陶磁も出土し、河口に近い川岸に立地状況から海上交通との関連をうかがわせる。

こうした海岸部の遺跡の他に、仙ノ山から南西方向へ約１㎞の地点に位置する白坏遺跡では、古墳時代の住居跡のほか、奈良・平安時代の建物跡や木簡が多数出土している。

平安時代末期には、石見銀山周辺を包括する大家荘という大規模な荘園が成立しており、その後、中世には石見銀山周辺に多くの荘園、国衙領が成立する。仁摩町天河内の白石遺跡、清石遺跡は、12～14世紀にかけて継続する遺跡で、総柱構造の主屋をもつ居宅遺構が検出されており、貿易陶磁器も一定量出土していることから、在地有力武士層の関与が考えられる。

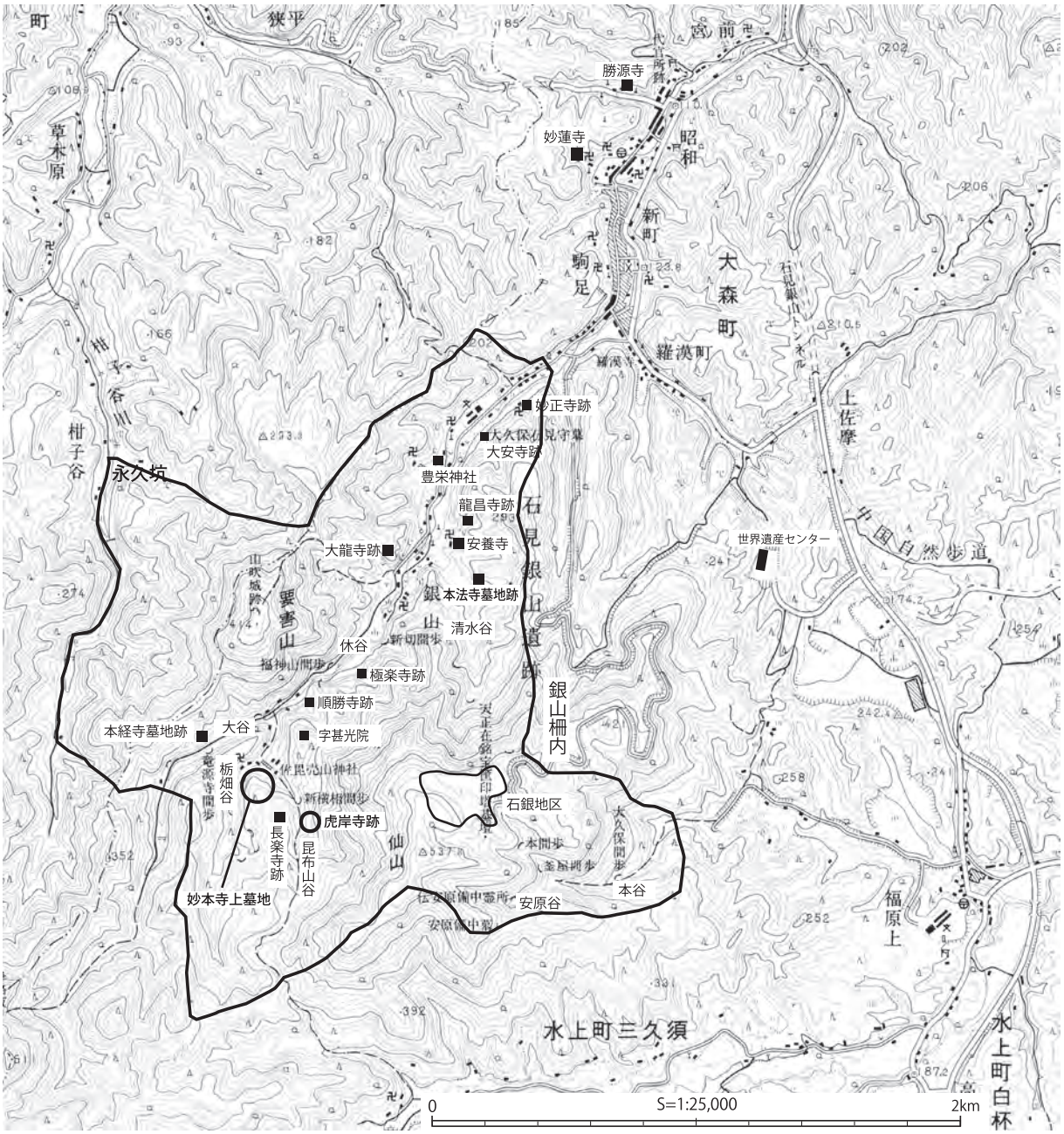
南北朝期には、周防・長門の守護であった大内氏が石見国守護を兼任するが、応永の乱（1399）で敗れ、石見国守護職を没収される。しかし、義弘の弟・盛見は、応永８（1401）年には大内氏の家督を実力で奪取し、石見国のうち邇摩郡を分郡として知行した。この分郡知行は大内政弘の代にも引き継がれた。永正年間（1504-1521）に至ると大内義興が石見一円の守護権を奪回した。

石見銀山は、『銀山旧記』では大永６（1526）年に博多の有力商人神屋寿禎によって発見されたと記されている。大内氏は博多の有力商人と結び、中国との勘合貿易を独占的に行っており、大内氏の支配下で石見銀山の本格的な開発が行われるようになった。天文２（1533）年には灰吹法が伝えられ、現地で製錬が行われるようになり、石見銀山の産銀量は急激に増大した。

戦国期には、大内氏や尼子氏、毛利氏により銀山領有をめぐる争奪戦が行われ、それに伴い多数の城館跡が銀山周辺や街道沿い、港周辺に遺されている。1560年代前半には毛利氏が尼子氏との銀山争奪戦に勝利し、石見銀山の支配権を確立した。

江戸期に入ると、石見銀山がある邇摩郡は、周辺の安濃郡などとともに石見銀山附御料に編入され、幕府直轄領となった。江戸初期には、初代奉行、大久保長安の開発により銀山は繁栄期を迎え、この頃の年間産銀量は約10,000貫（約37.5ｔ）と推定されている。寛永期を過ぎると、良鉱が乏しくなったことや、坑道が深くなり湧水処理に多大な経費を要するようになったことにより、採算に合わない間歩は採掘が停止された。延宝元（1693）年以降の記録によると、産銀量は年間約300貫（約１t）前後で推移し、幕末頃には年間約50貫（0.187t）を下回る状況であった。

明治維新後は、しばらく小規模な経営が続けられたが、明治19（1887）年に藤田組が経営をはじめ、近代的な鉱山開発が行われるようになった。近代の主要産品は銅で、明治後期から大正初期には軍需景気に乗り隆盛をみた。しかし、第１次大戦後の銅価格低下を背景として大正12（1923）年に石見銀山は休山した。



第２図　石見銀山遺跡（銀山柵内・大森地区）周辺図

第３章　調査の概要

第１節　調査の経過

昆布山谷地区は、戦国時代から明治時代にかけて鉱山や集落が営まれ、石見銀山遺跡の歴史を考える上で重要な場所である。平成22年度から大田市教育委員会によって発掘調査が行われていることから、平成27年度から石造物調査も同地区を対象とし、墓地や石造物からその歴史的過程の解明を目指すこととした。

４月15～16日には、虎岸寺跡とその背後にある虎岸寺墓地で銘文調査を行い、石造物の種別や年代を把握した。

６月15日には、元島根県文化財保護審議会委員の田中義昭氏と立正大学文学部教授の池上悟氏を招いて、第１回目の石造物調査指導会を開催し、今後の妙本寺上墓地の調査計画について検討した。当年度は妙本寺上墓地でも古い石造物が多数密集するＥ地点で悉皆調査を行い、また、佐毘売山神社社家の墓所などがあるＧ地点で銘文調査を実施することとした。

島根県教育委員会、大田市教育委員会の職員で７月29日に妙本寺上墓地Ｅ地点の下草除去や石造物の清掃を、７月30・31日にＧ地点の銘文調査を行った。８月28日～29日にかけては、県・市の職員のほか池上悟氏と立正大学院生２名も加わり、Ｅ地点の悉皆調査を行った。石造物の点数が膨大であったため、９月から11月にかけて補足的に実測作業等を行った。

現地調査終了後は、図面・写真などの記録類を整理し、12月７日には調査指導会を開催し、当年度の調査成果について総括を行った。

第２節　調査の方法

妙本寺上墓地E地点の悉皆調査では、事前に下草等を除去したうえで、石造物の分布状況を確認し、墓塔・墓標など石造物の番号を付け、大田市教育委員会作成の「石見銀山遺跡地形図」を基におおよその地点を記録した。また、石造物調査カードを作成するとともに、写真撮影を行った。調査カードには、実物の１／５で石造物を実測し、種類・銘文など必要事項を記入している。銘文を持つものの一部については、拓本を採っている。

なお、今回の調査では石造物の点数が膨大であったため、遺存状態の良くないものや、近世中期以降の墓標についてはカード作成や実測は省略し、石造物の種別・銘文の記録、規模の計測のみにとどめた。

虎岸寺跡と妙本寺上墓地Ｇ地点の銘文調査では、実測は行わなかったが、石造物の分布状況と種別・銘文を網羅的に記録しており、妙本寺上墓地Ｇ地点では規模の計測も行っている。

第３節　昆布山谷地区及びその寺院・墓地の概要

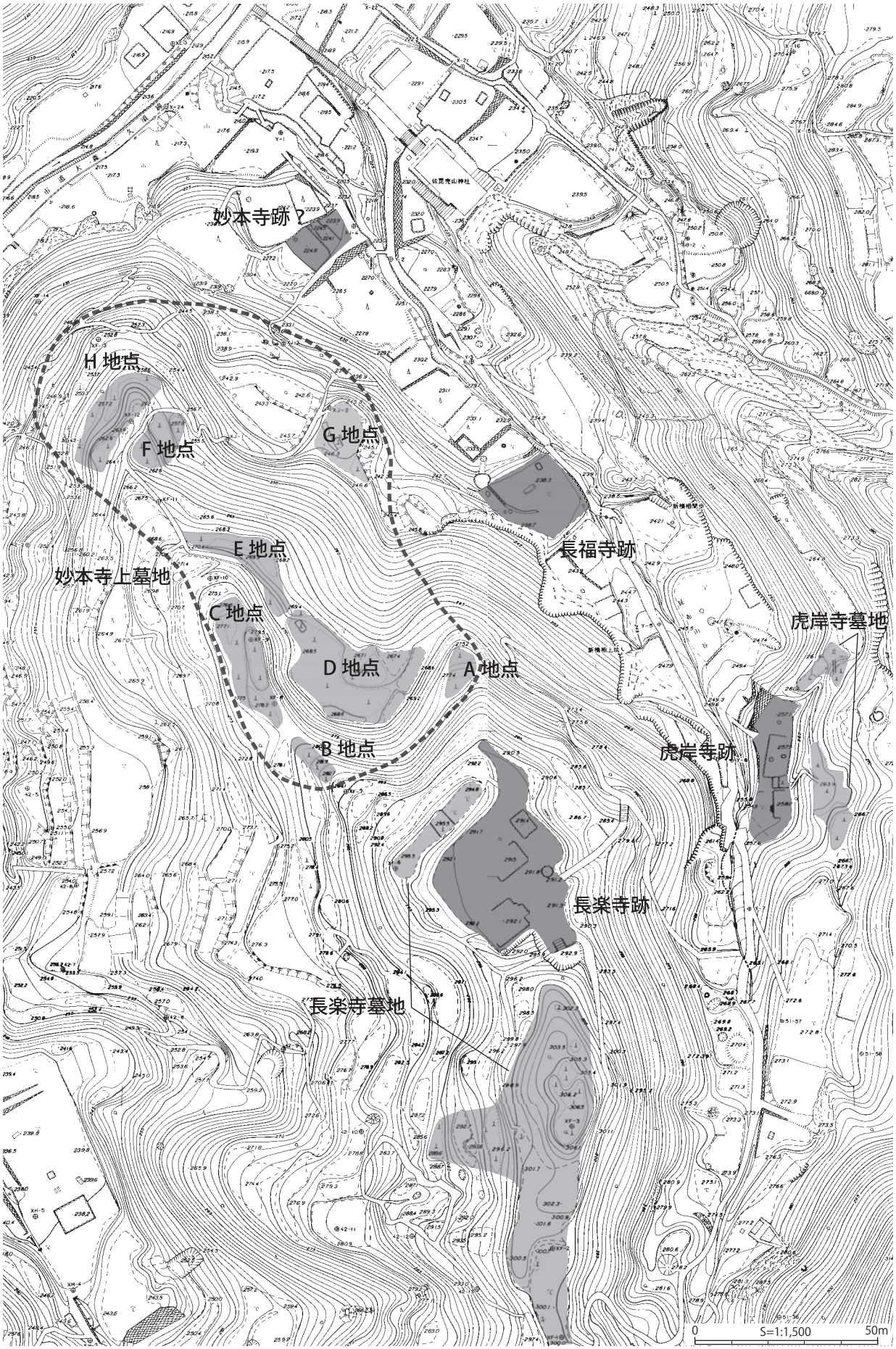
（１）昆布山谷地区の概要

昆布山谷は、銀山六谷の一つで、仙ノ山山頂から北西の方角に位置している。南北方向に延びる長さ約600ｍの谷で、佐毘売山神社の西麓で栃畑谷に合流する。

この谷は、古くは天文年間から新しくは明治期まで、さまざまな史料に登場する。例えば、「銀山旧記」(1)、「高野山浄心院過去帳」(2)には天文年間の記録が見られる。「安田家文書」や「高橋家文書」などには江戸時代における昆布山谷に関する詳細な記録が残されている。幕末～明治期の絵図や切図などには、谷筋の平坦面の細かな情報や道、溝まで詳しく描かれている。また、明治時代の「要書録」（上野寛司氏所蔵）(3)には藤田組によって建設された鉱山施設も記されている。

また、大田市教育委員会による発掘調査(4)や分布調査(5)では、近世前半から明治期までの遺構・遺物が確認されている。

このように、昆布山谷地区は16世紀から明治時代にかけて鉱業活動や集落形成がなされたと考え



第 3 図　昆布山谷地区周辺図

られるところで、石見銀山の開発初期から隆盛・衰退、近代の再開発までの歴史を知るうえで重要な地区といえる。

谷筋の東西には佐毘売山神社や長楽寺などの寺社や墓地が存在し、多数の石造物が分布している。発掘調査や文献史料の調査のほか、石造物調査も詳細に進めていくことにより、この地区の変遷について総合的な検討が可能になるものと考える。

（2）昆布山谷地区の寺院

明治 4 （1871）年の上知令で、銀山町の各寺社が政府に寺社領を差し出す際に提出した文書と絵図（図版 1 、木曽重美氏所蔵、以下「木曽家文書」）があり、昆布山谷の谷筋の西側に長楽寺、長福寺、妙本寺、東側に虎岸寺が記されている。これらの概要は以下のとおりである。

長楽寺

真言宗の寺院で、明治12年の「寺院明細帳」（大田市所蔵）によれば、もとは仙ノ山に造立され、その後、年代不詳だが昆布山谷に移転し、明治10（1877）年 9 月に神宮寺に合併された、と記されている。

境内地は昆布山谷の西側の尾根上にある標高292mの平坦面にあり、寺院建物の基壇が残存している。境内地の北西から南西には土塁状の高まりが設けられている。

長福寺

「寺院明細帳」には曹洞宗とあるが、寺の由緒は不詳である。「木曽家文書」の絵図のほか、寛政年間の「石見国銀山麓絵図」（高橋家文書）でも昆布山谷の西側に描かれている。また、寛政元（1789）年の「両御巡見様之諸事覚書」（上野家文書）[6]や「木曽家文書」には禅宗寺院として記載されている。

境内地は、「長福寺」の字名から、大田市大森町ホ366-1に所在したと考えられる。谷筋を通る道沿いにあり、東西13〜20m、南北21mの台形状の平坦面（標高238m）が広がっている。

妙本寺

日蓮宗の寺院で、「寺院明細帳」によれば、元亀（1570〜1573）年間に日基上人により創立されたが、天明 2 （1782）年の火災で記録類が焼失したため不詳という。

「木曽家文書」の絵図には、寺は谷筋の道沿いにあり、手前側には橋が描かれている。第 3 図に「妙本寺？」と示した位置は、そのすぐ北側に橋の基礎とみられる部分があることから、絵図の寺の位置と対応すると考えられる。

虎岸寺

史料によっては「虎岩寺」と表記するものもあるが、ここでは「虎岸寺」を用いる。寺の由緒は不詳だが、寛政元（1789）年の「両御巡見様之諸事覚書」（上野家文書）や「木曽家文書」では禅宗寺院として記載されている。明治 4 （1871）年の「銀山町未年宗門帳」（高橋家文書）では、銀山町にある虎岸寺の檀家は 1 戸となっている[7]。明治10（1877）年頃にはすでに境内地は官有地となっており、官有地払い下げにあたって同20年12月13日付で藤田組が村役場へ提出した文書には、「一、右之内ニ弐百七拾四番ハ原ト虎岸寺ト云ヘル小坊アリシカ、元来此寺所得檀家等ノ無キ為維持ニ耐へ難ク、明治五六年ノ頃遂ニ破壊シ其後用タル所ナシ」と記されている（上野家文書「要書録」(13-4)）。

「要書録」の記述や、「虎岸寺」という字名から大田市大森町ニ274とその周辺に境内地があったと考えられる。標高257mにある平坦面で、谷筋が通る西側を石垣で区画している。 2 基の寺院建物の基壇と、その間に挟まれた 1 基の石塔基壇が残っている。

（3）昆布山谷地区の墓地

昆布山谷地区では、これまでの調査によって長楽寺墓地と妙本寺上墓地、虎岸寺墓地が確認されており、各墓地の石造物の種類と概数が把握されている[8]。また、長楽寺墓地については平成14年度に悉皆調査が行われている[9]。各墓地の概要とこれまでの調査状況は以下のとおりである。

長楽寺墓地

境内地の北西側にある土塁状の高まりと、境内地の南側に延びる尾根上及びその西側の丘陵斜面に墓地が形成されている。

平成14年度の悉皆調査では、長楽寺跡も含めて212基の石造物が確認されている。境内地北西側の墓地は、歴代住職の墓などから長楽寺に直接関連する墓地と考えられる。一方、南側の尾根上や西側斜面の墓地は、真言宗、浄土真宗、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗といった複数宗派の墓石が存在し、共同墓地として営まれたものと推測される。

妙本寺上墓地

長楽寺跡から北西方向に延びる尾根上から東側の丘陵斜面にかけて広範囲にまたがっており、昆布山谷地区では最も広く、また石造物の点数が多い墓地である。

東側の斜面の字名「妙本寺ノ上エ」から「妙本寺上墓地」と呼称されているが、尾根上部の字名は「元西向寺昆布山平」、尾根先端側の字名は「栃畑谷元泉山」である。また、「妙本寺上墓地」と日蓮宗「妙本寺」との関連性も明らかでない。こうしたことから、必ずしも適当な呼び方とは言えないが、名称変更による混乱を防ぐため、これまでどおり妙本寺上墓地と呼ぶこととする。

墓石は全体に万遍なく分布するのではなく、尾根上や斜面中腹の平坦面に多く存在している。ある程度のまとまりが見られるところをA～H地点に分けたが、これはあくまでも便宜的な区分で、A～H地点のほかにも墓石が点在しているところもある。墓域の設定・区分については、今後の調査によって見直しが必要となるかもしれない。

妙本寺上墓地は、平成10年度に踏査で約330基の石造物が確認され(10)、慶長（1596～1614）年間以前の墓塔が多数存在することで注目された。平成13年度の分布調査では、一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、角塔、無縫塔など総概数で500基近い石造物が確認されている。

虎岸寺墓地

虎岸寺跡の背後の丘陵上で、寺跡の北東側と東側に造成された平坦面に位置する。

平成13年度の分布調査で、概数ではあるが、組合せ宝篋印塔１基、角塔33基、石仏10基が確認されている。

[註]

(1) 島根県教育委員会2003『石見銀山史料解題　銀山旧記』
(2) 田中圭一1999「わが国銀山開発に於ける石見人の役割～「高野山浄心院過去帳」を中心に～」『石見銀山遺跡総合調査報告書』第４冊 島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか
(3) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2016『石見銀山近代史料集　第一集』
(4) 大田市教育委員会2012『石見銀山遺跡発掘調査概要20』大田市教育委員会2013『石見銀山遺跡発掘調査概要21』大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡発掘調査概要22』大田市教育委員会2015『石見銀山遺跡発掘調査概要23』
(5) 尾村勝2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷―文献史料と分布調査成果からみる―」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究４』島根県教育委員会・大田市教育委員会
(6) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2001『石見銀山遺跡石造物調査報告書１　妙正寺跡』
(7) 仲野義文2009『銀山社会の解明　近世石見銀山の経営と社会』
(8) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書５　分布調査と墓石調査の成果』
(9) 島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書４　長楽寺跡・石見銀山附地役人（河島家・宗岡家）』
(10) 島根県教育委員会・大田市教育委員会ほか1999「石造物調査報告書」『石見銀山遺跡総合調査報告書』第３冊

第４章　妙本寺上墓地Ｅ地点の調査

第１節　墓地の立地と石造物の分布

妙本寺上墓地Ｅ地点は、大田市大森町ホ363-1、字名「妙本寺ノ上エ」に所在する。昆布山谷の西側の丘陵中腹に位置し、上下２段の平坦面（以下、上段平坦面、下段平坦面）とその間の斜面（以下、中段平坦面）を中心に多数の石造物が分布しており、上段平坦面より上方の斜面（以下、上方斜面）の下部から裾部にも若干存在する。

下段平坦面は標高268～269m、長さ22m、最大幅６ｍで、南東方向に張り出している。上段平坦面は標高270m前後で、２～３ｍの幅で南西－北東方向に帯状に延びている。北東側で尾根筋を通る里道とつながり、南西側には一段下ったところにＤ地点の墓地が広がる。

中段斜面から下段平坦面にかけては、石造物が特に密集している。しかし、石塔部材が散乱した状態で、本来の位置はほとんど分からない。分布密度からすると、これらの全てが元からＥ地点にあったのではなく、墓地の整理などによって他所から搬入されたものが含まれている可能性も考えられる。

下段平坦面や中段斜面には石造物のほかに、墓の基壇らしき集石・石列や石積みがいくつか見られる。中段斜面南側の裾部には２基の石積み基壇が並んでおり、それぞれほぼ原位置とみられるかたちで、組合せ宝篋印塔の基礎（113・125）が残っていた（図版３下）。

上段平坦面では、無縫塔（39）や一石宝篋印塔（154・155・161～163・165・166）・一石五輪塔（164）が点在し、これらは斜面裾に沿って配置されたように見える。また、南端には墓標が寄せ集められている。上方斜面の下方から裾部にかけては地蔵や墓標、宝篋印塔の部材などがあり、これらは尾根上から転落してきた可能性がある。

第２節　石造物の様相

一石宝篋印塔42基、一石五輪塔12基、組合せ宝篋印塔35基分以上（相輪35点、笠32点、塔身18点、基礎22点、台座7点）、無縫塔２基、光背形墓標２基、位牌形墓標３基、円頂方形墓標５基、円頂方柱墓標１基、地蔵２基を確認した。

一石宝篋印塔（第８～10図）

42基確認したうち、33基を図示した。相輪の付け根もしくは途中で折れているものが多く、基礎から相輪の宝珠まで残っているものは11基であった。

宝珠の形態は、下部に請花を入れるものと、請花を持たず、中央に溝を入れているものがある。130は九輪下部の請花と基礎の反花が重弁になっている。

12基で紀年銘が確認できた。65は慶長４（1599）年、99は慶長12年、133は慶長13年、108は慶長14年、81は慶長15年、37・64は元和３（1617）年、70は元和７年、91は寛永２（1625）年、104は正保３（1646）年、75・166は元禄10（1697）年であった。13は慶長元号を持つが、年は判別できなかった。

65・161は「童子」・「童女」の戒名を持つ子どもの墓で、基礎底面から笠上面までの高さが50㎝未満と小型である。ただし、75・81・108・172のように大人の墓でも小型の石塔は存在する。

戒名や紀年銘のほか、「空・風・火・水・地」（30・161）や「真如大」（64）、梵字で「キャ・カ・ラ・バ・ア」（75・166）と刻まれたものがある。116・133は、塔身の月輪内部に梵字キリークが彫られている。

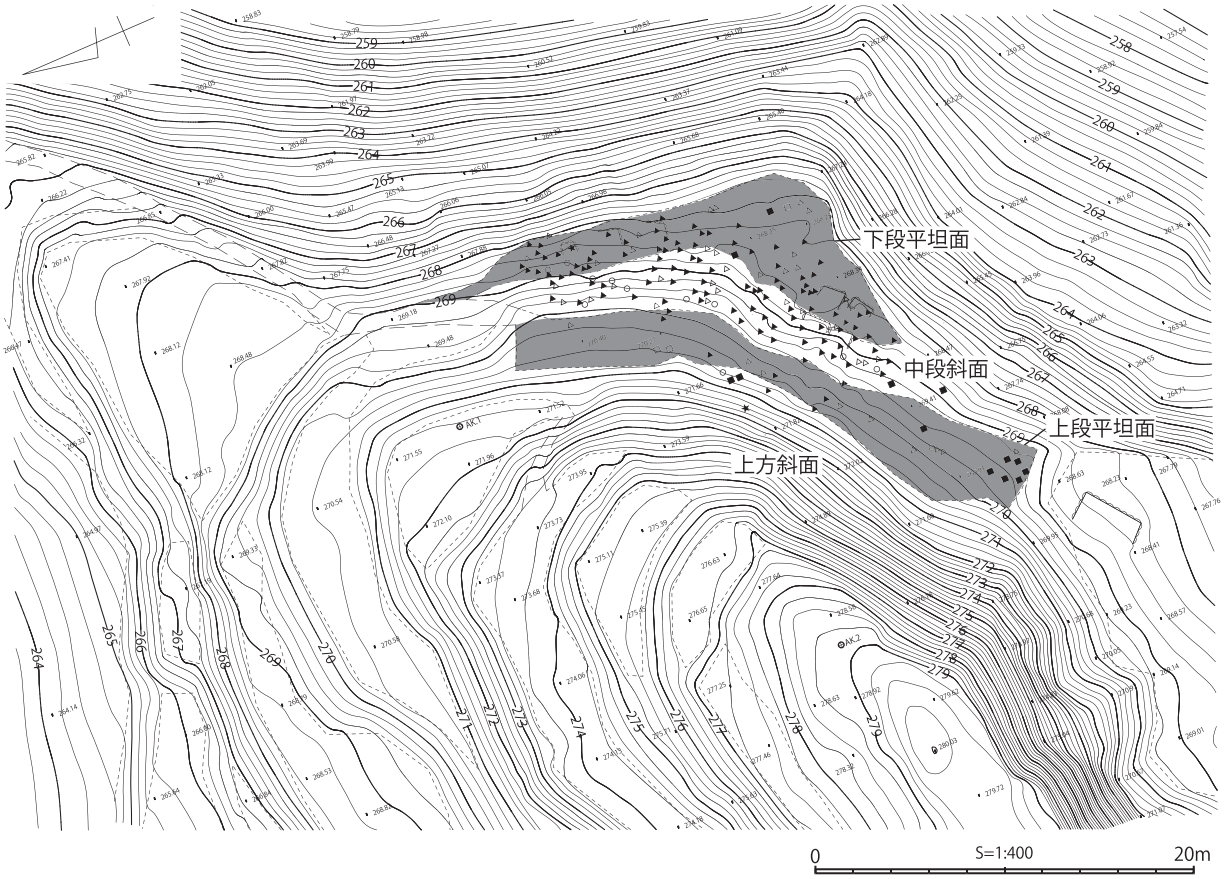
一石五輪塔（第10図）

12基を確認しており、これらのうち７基を図示した。紀年銘を確認できたのは33・62の２基で、いずれも慶長19（1614）年のものである。

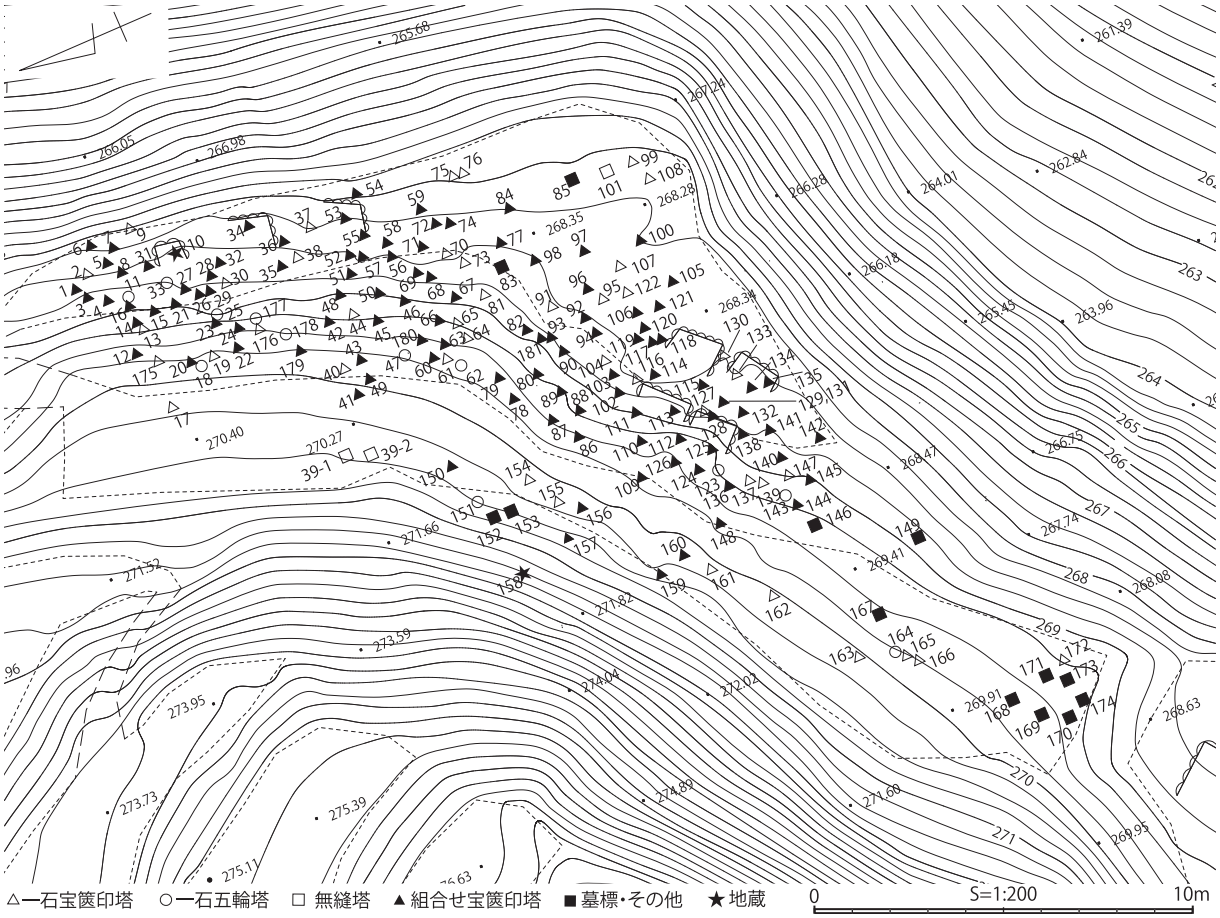
11・18は火輪に梵字が刻まれている。

組合せ宝篋印塔（第11～16図）

組合せ宝篋印塔は、相輪35点、笠32点、塔身18点、基礎22点、台座７点が確認されており、35基



第４図　妙本寺上墓地E地点周辺図



第５図　妙本寺上墓地E地点石造物分布図

第１表　妙本寺上墓地Ｅ地点 組合せ宝篋印塔分類表

	大　型	中　型	小　型
相輪	・9点（番号…**68・115・1**・117・**112・102・60・84・69**） ・伏鉢径26～29㎝ ・高さ73㎝以上 ・いずれも九輪下部に請花を持つ	・10点（番号…**157・27・92・8・54・51・77・31・159・14**） ・伏鉢径21～25.5㎝ ・高さ52～73㎝前後 ・ほとんどが九輪下部に請花を持つが、31は持たない	・10点（番号…**29・140**・52・**34・7・128・129・138・106・121**） ・伏鉢径17～20㎝ ・高さ46～55㎝前後 ・九輪下部に請花を持たない
笠	・8点（番号…**45・79・89・114・71・24・124・46**） ・最大幅53～57㎝ ・高さ35～36.5㎝ ・いずれも軒下に請花を持つ	・9点（番号…**74・32**・136・**41・21・111**・35・**42・23**） ・最大幅42～50㎝ ・高さ24.5～31.5㎝ ・いずれも軒下に請花を持つ	・12点（番号…**145・110・131・96・49・140・121・160・132・28**・6・**43**） ・最大幅30～37㎝ ・高さ18.5～23㎝ ・軒下に請花を持たないものもある
塔身	・6点（番号…**88・72**・78・**119・126・66**） ・最大幅28～29㎝ ・高さ27～28.5㎝	・4点（番号…**3・15・59・26**） ・最大幅22.5～25㎝ ・高さ22～23.5㎝	・8点（番号…**53・150・120・118・134・144・63・103**） ・最大幅16.5～20㎝ ・高さ15～19㎝
基礎	・9点（番号…**12・125・97・55・56・94・113・90・148**） ・最大幅40～44㎝ ・高さ37～42.5㎝	・6点（番号…**87**・**5**・57・58・**16・36**） ・最大幅36～37㎝ ・高さ31.5～推定35㎝前後	・7点（番号…**100・141・86**・20・**134・135・109**） ・最大幅25～30㎝ ・高さ22.5～27.5㎝
台座	・5点（番号…**80・50**・98・**125**・**4**） ・最大幅66～55㎝ ・高さ8～12㎝ ・受部41.5～47㎝	・2点（番号…67・**48**） ・最大幅53.5～55㎝ ・高さ8.5㎝ ・受部39㎝	—

※番号は伏鉢径、最大幅の大きい順に記載、太字は実測図あり

以上存在したと推測される。いずれも転倒しており、樹立しているものはなかった。

組み合わせを検討するため、まず、各部材を規模によって整理・分類することとした。第11～16図では、部材ごとに最大幅の大きい順に並べた。また、第１表は、これらを大型・中型・小型に分類し、規模・属性をまとめたものである。

以下に、部材ごとに特徴を見ることとする。

相輪は、いずれも伏鉢と九輪との間に突帯を巡らせており、その上に請花を持つものと持たないものに分類できる。大型品はいずれも請花を持ち、中型品も31以外は請花を持つが、小型品はいずれも請花を持たないものである。157は、九輪に５本の沈線が施されており、宝珠下部や九輪下部の請花の弁数が他のものよりも多く、古い様相を示す。上方斜面の裾で確認したもので、尾根上からが転落した可能性が高い。

笠は、軒下に請花を持つものがほとんどだが、請花がないものが３点（28・49・43）あり、いずれも小型品に分類される。軒上の段級は２段のものが多いが、24・89・110は３段である。110は軒下の請花の主弁が二重になっている。

塔身は、正面に月輪を持つものがあり、118には内側に梵字が彫られている。120は風化のため内側の文字は判読できない。

基礎は、いずれも塔身を受ける部分がわずかに突出し、その周囲に反花座を持つ。

紀年銘が確認できたものは７基で、94は慶長12年、87は慶長14年、56は慶長15年、109は寛永２年、125は寛永13年、113は寛永18年、141は正保３年のものである。このほか、年の特定はできなかったが、５は「慶長」、16は「元和」の元号が読み取れる。第２表に、高さ・幅が明確なものを年代順に並べて比較した。概ね年代が下るほど幅

第２表　組合せ宝篋印塔基礎の高さ・幅比率

No.	西暦	高さ	最大幅	高／幅
94	1607	37.5	43	0.87
87	1609	31.5	37	0.85
56	1610	39.5	43	0.92
109	1625	22.5	25	0.90
125	1636	42	43	0.98
113	1641	42.5	42	1.01
141	1646	25	30	0.83

に対する高さの比率が大きくなる傾向が見られる。最も新しい141は、これらの中で高さの比率が最も小さくなっているが、イレギュラーなものの可能性がある。

109は反花の主弁が二重になっており、110とセットになっていた可能性がある。幅が25cmと小型品の中でも最も小さい。戒名に「早世」の二字が見られることから、若年で亡くなった人の墓と考えられる。148は正面に戒名が、背面には「杣谷殿」と銘が刻まれている（図版７）。

台座は、いずれも中央に基礎受部が一段高く作り出されており、その外周に蓮弁が彫られている。受部上面が彫り窪められているもの（４）と、平坦なもの（48・50・80）がある。基礎との組み合わせを考慮すると、受部の一辺が41.5～47cmのものが大型品、一辺37cm程度のものが中型品に伴うと推測される。

第１表の分類から、組合せ宝篋印塔の相輪から基礎までの高さは、大型品では170cm以上（台座を伴う場合は180cm以上）、中型品では概ね130～160cm程度、小型品では125cm以下になると推測される。部材の分布状況、規模、属性から組合せを想定したものを第６図に示した。

A（112・124・126・125）は中段斜面西側の基壇とその周辺で確認されたもので、相輪から基礎までの高さが192cm程度、台座まで含めると202cm程度になると考えられる。B（115・114・119・113）は、Aに隣接する基壇とその周辺で確認されたもので、総高が195cm程度と推定される。C（69・45・88・94）は中段斜面中央から北寄りの広い範囲で部材が散乱していたが、相輪から基礎にかけて「空・風・火・水・地」の文字が輪郭線を持って内側を浮き上がらせるように彫られていたことから、この組合せを復元した。総高は176cm程度と考えられる。D（14・23・26・36）、E（27・21・15・16）は中型品で、基礎の下部が欠けているが、総高は140～145cm程度になると推定した。F（128・132・134）、G（121・120・100）、Hは小型品で、総高120cm前後になると考えられる。

このほかにさらに多数の組合せが存在したはずであるが、現状では復元は困難である。

部材から大型品が９基以上で、組合せ宝篋印塔の１／３近い割合を占めている。そして、大型の組合せ宝篋印塔の中でも特に大きいものが、石積みの基壇を伴って建てられていることは、この墓地の中でも注目すべきところである。

無縫塔（第16図）

39・101の２基を確認した。39は基礎と塔身がセットになるもので、基礎には慶長19（1614）年の紀年銘と戒名が刻まれている。「大徳」号の戒名から僧侶の墓と考えられる。

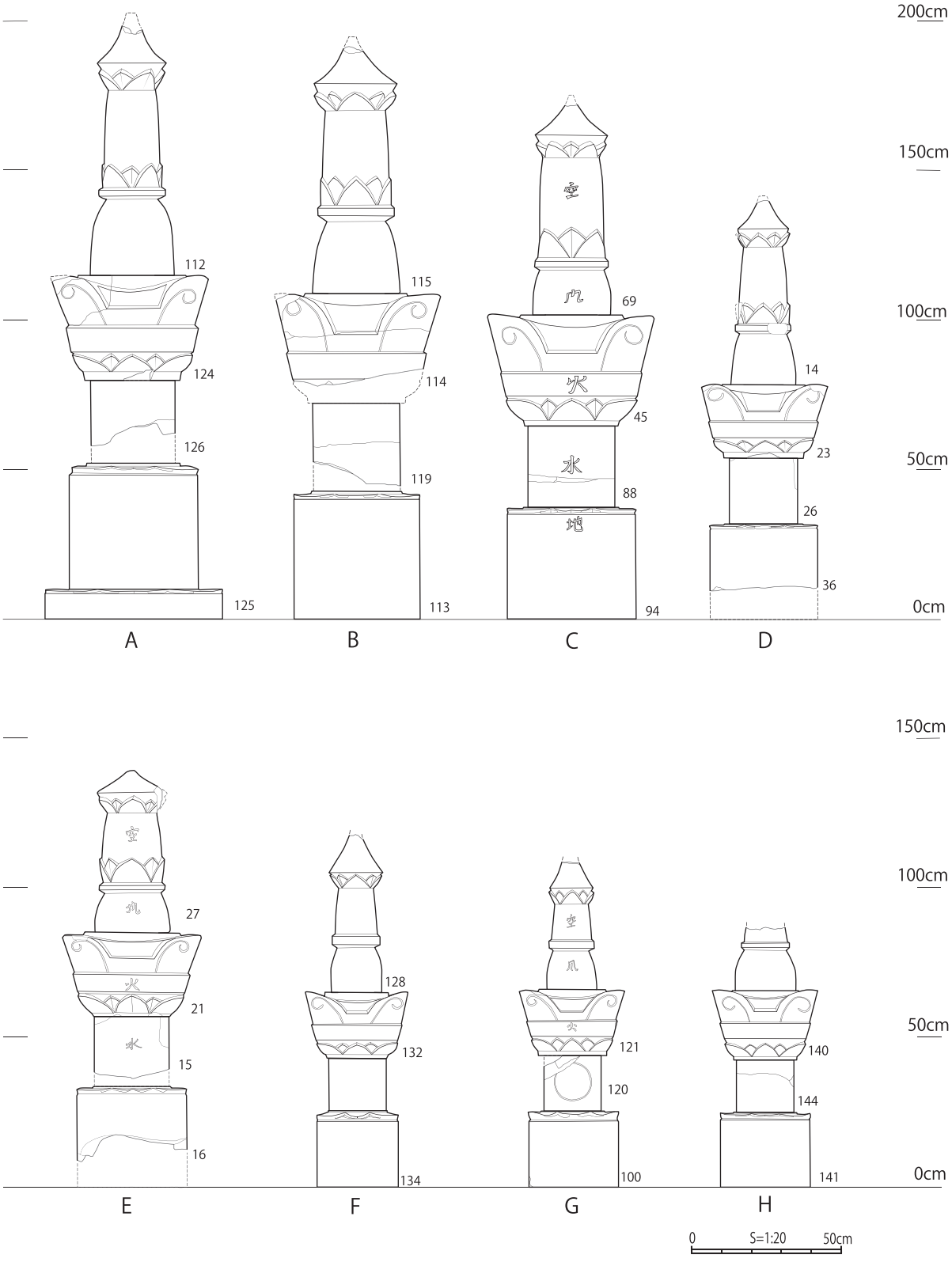
墓標（第16図）

光背形墓標２基、位牌形墓標３基、円頂方形墓標５基、円頂方柱墓標１基を確認し、このうち光背形墓標２基（146・149）を実測した。

146・149は、両側縁が垂直に立ち上がり、左右の上隅で鈍角に屈折しており、頂部が直線的な切妻状になっているものである。正面は中央を刳り込んで枠取りしており、下部には蓮弁が彫られている。146の表面は著しく風化しているが、慶長14（1609）年の紀年銘が判読できる。

位牌形墓標では、享保14（1729）年、享保19年、宝暦６（1756）年の紀年銘が確認されている。

円頂方形墓標では、享保９（1724）年から明和８（1771）年の紀年銘が認められた。



第６図　組合せ宝篋印塔復元想定図

円頂方柱墓標は享保９（1724）年銘のもので、墓標正面の一部が打ち欠かれて判読しづらいが、法名の頭に「釋」の文字を持つもののようであり、浄土真宗の墓石と考えられる。

地蔵（第16図）

10・158の２基を確認した。いずれも光背と蓮華座を伴う立像である。10は宝永7（1710）年、158は享保元号の紀年銘を持つ。158は尾根東側斜面にあり、本来は尾根上に配されていた可能性もある。

その他（第16図）

83は、側面形が台形状を呈し、上面に半球状の突出部を持つ。下面は四角く刳り込まれている。上面の突出部がほぞとなり、その上に石塔が置かれた可能性が想定されるが、これまでに類例を見ないものである。

このほか石殿の基底部とみられる部材もあったが、小片のため図示しなかった。

第３節　まとめ

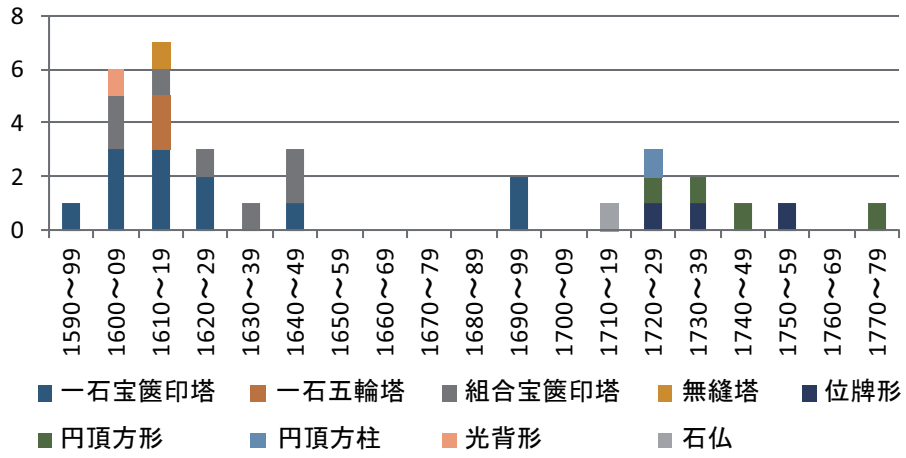
墓域の形成と変遷

妙本寺上墓地の中でもE地点は、古い墓塔が数多く密集する場所で、同墓地、また昆布山谷地区における墓域の形成を考える上で重要な地点である。今回の調査によって、この地点の石造物の構成と造立状況の変遷を把握することができた。

第７図は、紀年銘石造物の形式・年代別点数を示したものである。石造物の中には紀年銘を持たないもの、あるいは判読できないものもある（特に近世前期の墓塔に多い）ため、絶対数を示すものではないが、造墓状況の変遷を反映しているものと考える。

E地点で最も古い石塔は、慶長４（1599）年銘の一石宝篋印塔である。その後、1600年代～1610年代にかけて造墓数はピークを迎えるものの、1620年代から減少傾向となる。正保３（1646）年から元禄10（1697）年まで、50年余り紀年銘が確認されていない。この間、全く造墓が行われなかったのか定かではないが、これまでの銀山地区における石造物悉皆調査でも17世紀後半の墓石は少ないことから(1)、造墓状況は低調であったと考えられる。以上の傾向は、17世紀初め頃の銀山の繁栄とその後の衰退、それらに伴う人口変動などと対応したものと考えられる。

18世紀前半には、従来の一石宝篋印塔・一石五輪塔・組合せ宝篋印塔に変わって、墓標や地蔵が採用される。こうした点も、これまでの石造物調査の成果で認められる傾向であり、この頃を画期



第７図　妙本寺上墓地E地点の年代別石造物造立状況

として銀山地区全体で墓石の形式や葬制の変化があったと考えられる。

ただし、銀山地区全体では18世紀前半から19世紀初頭にかけて墓石数が順調に増加しているのに対し、E地点では大きな伸びはなく、明和８（1771）年のものが最後となる。

E地点で墓石が飽和状態になったために、他の地点に墓地を求めたのか、それとも昆布山谷地区全体でも同様の傾向を示すものか、周辺地点を含めて調査したうえで検討していくべきものと考える。

墓地と宗派

Ｅ地点の墓石のうち、「譽号」の戒名を持つものは、可能性があるものも含めて20基認められ、それ以外に一石宝篋印塔の塔身に阿弥陀如来を意味する梵字キリークが刻まれたものが１基あった。これらは、浄土宗の墓と考えられる。慶長（1596～1615）年間から元禄10年までのものがあり、墓塔のほかにも光背形墓標が１基ある。

一方、頭に「釋」の文字が入る浄土真宗の法名の墓石は、可能性があるものを含め３基認められた。いずれも墓標で18世紀代のものである。これらは、上方斜面の下部や上段平坦面の南寄りで確認されたもので、原位置から動かされている可能性がある。

このほかに戒名は読めるが宗派が特定できないものが８基（うち６基が子どもの墓）あり、それ以外は戒名がないか、判読できないものであった。

以上のことから、Ｅ地点は、当初は浄土宗寺院に附属する墓地であった可能性が考えられる。尾根上のＣ地点の字名は「元西向寺昆布山平」であり、浄土宗寺院の「西向寺」(2)との関連性を想定しておきたい。

大型の組合せ宝篋印塔について

Ｅ地点では組合せ宝篋印塔が35基分以上確認されている。大型・中型・小型に分類でき、大型のものは相輪から基礎までの総高がおおむね170㎝以上になると推測される。こうした大型品が、相輪や基礎の数から、少なくとも９基はあり、数・割合ともに、これまでに調査されたほかの墓地と比べても多い。

とりわけ、第６図のＡ・Ｂは際立っており、Ａは台座も含めた高さが202㎝程度、Ｂは相輪から基礎まで195㎝程度とみられる。両者は、中段斜面南側の裾付近に２基並んだ石積み基壇上にそれぞれ建てられており、この墓地の中でも象徴的な石塔として偉容を誇っていたのであろう。

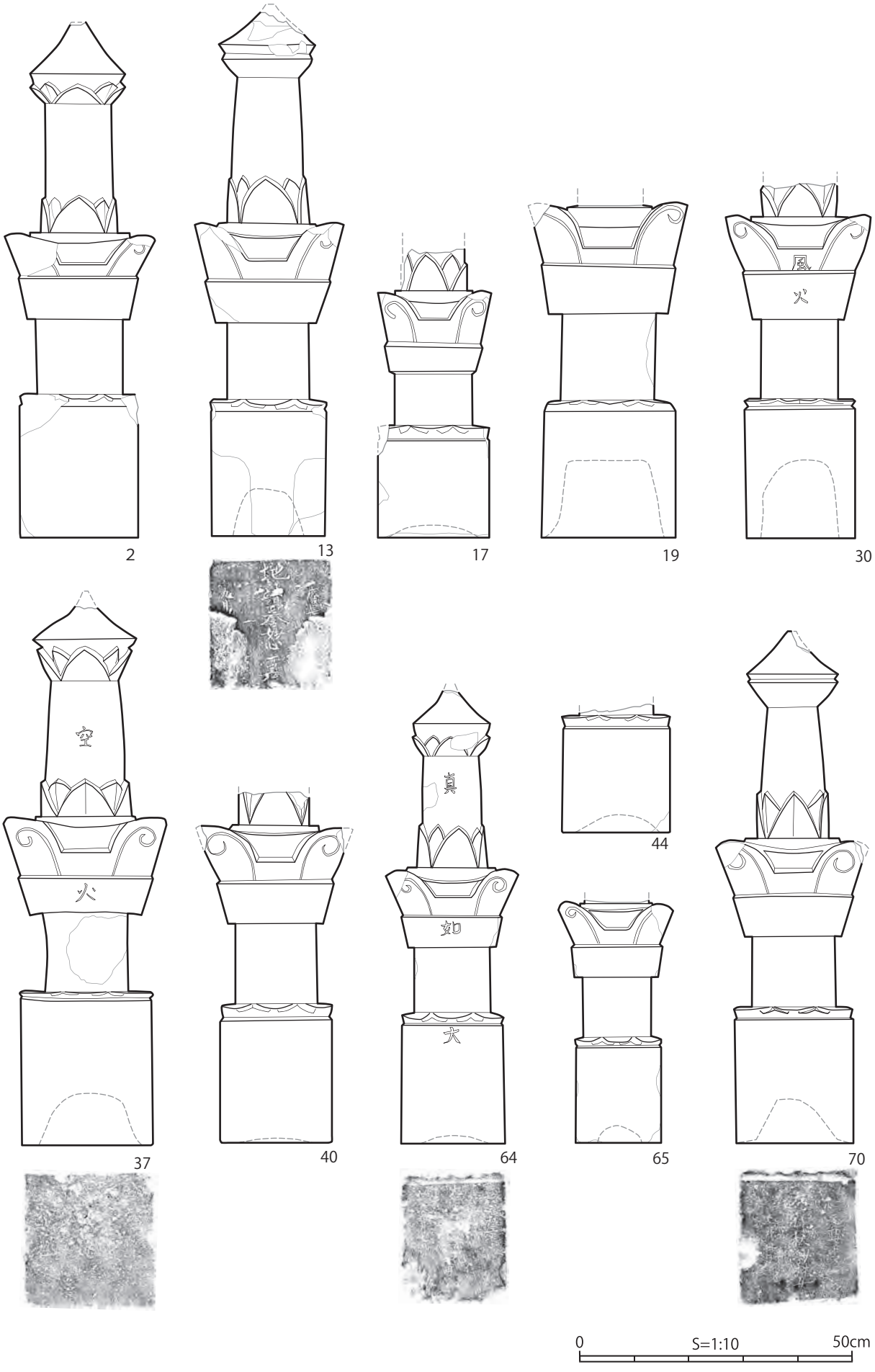
Ｅ地点の大型宝篋印塔の造墓者は不明であるが、銀山の最盛期にあたる17世紀前半に、昆布山谷に営まれていることから、鉱山開発と関わりを持った有力者・富裕層の墓であった可能性が考えられる。

［註］

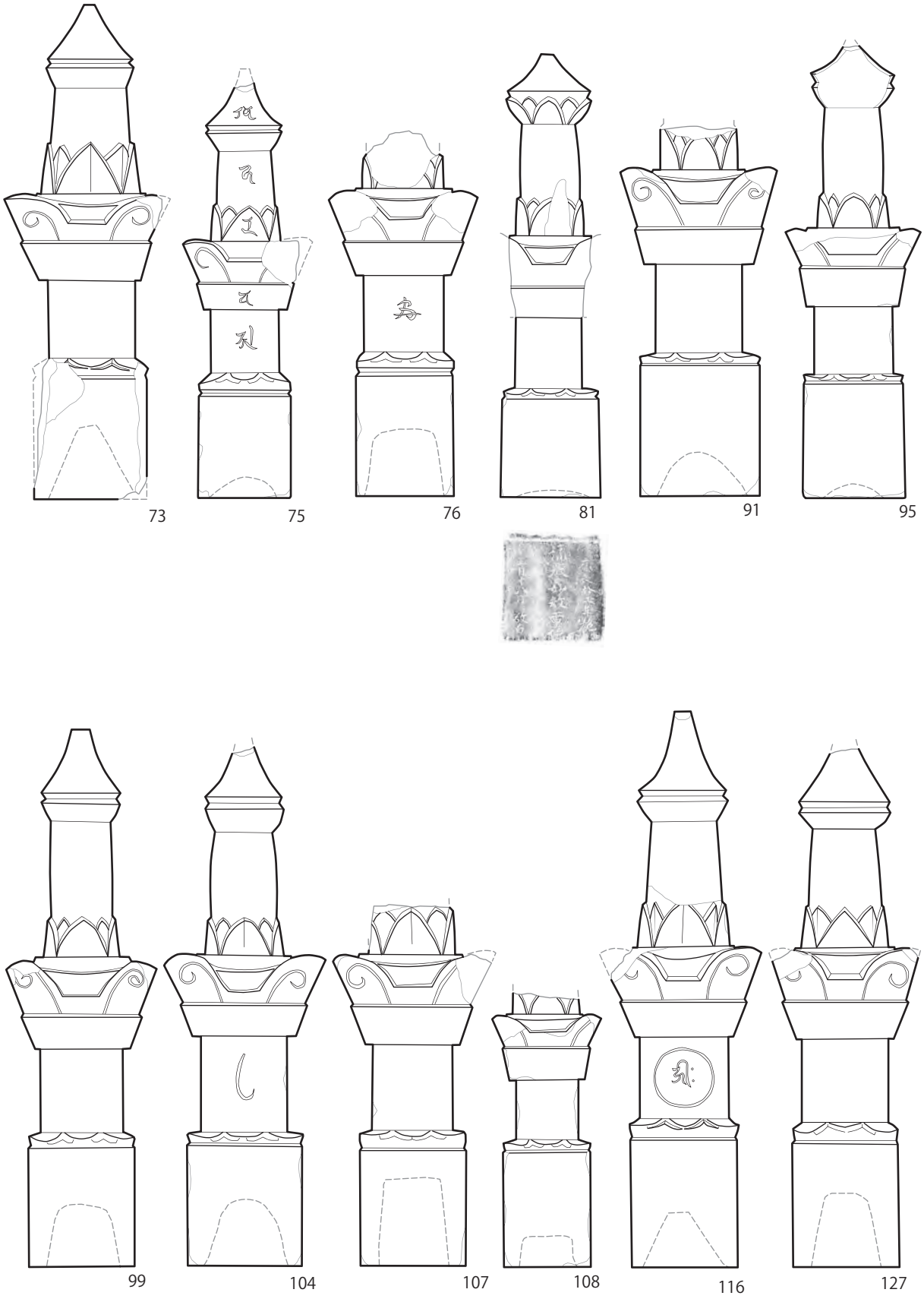
（1）島根県教育委員会・大田市教育委員会2004『石見銀山遺跡石造物調査報告書５　分布調査と墓石調査の成果』

（2）西向寺については、明治12年の「寺院明細帳」に由緒不詳とある。また、『銀山百か寺』（三瓶古文書を読もう会1995）には、昭和22年に極楽寺に合併、同28年に同寺に移る、と書かれている。

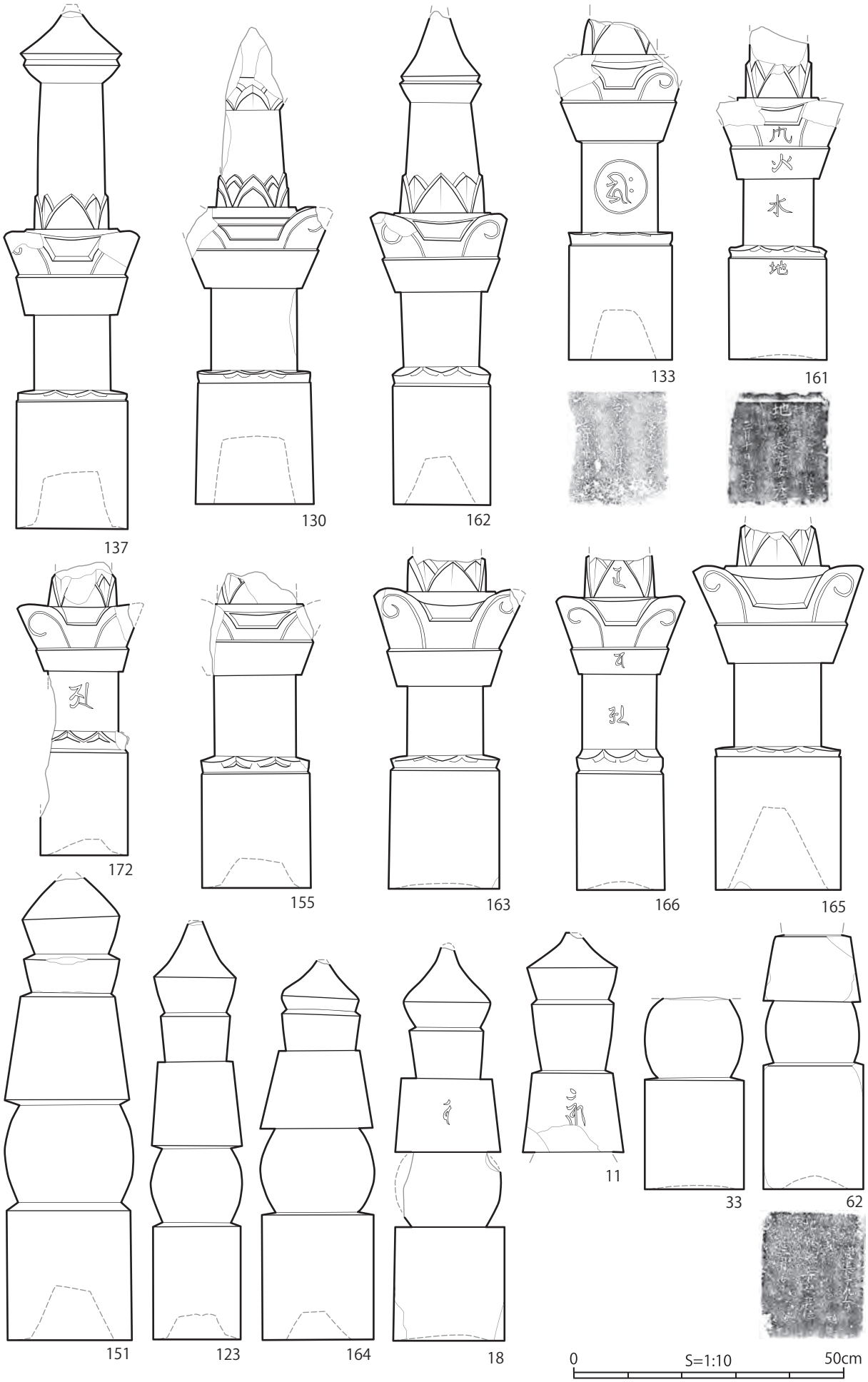
なお、「木曽家文書」の絵図では、西向寺は栃畑谷の西側に描かれている。



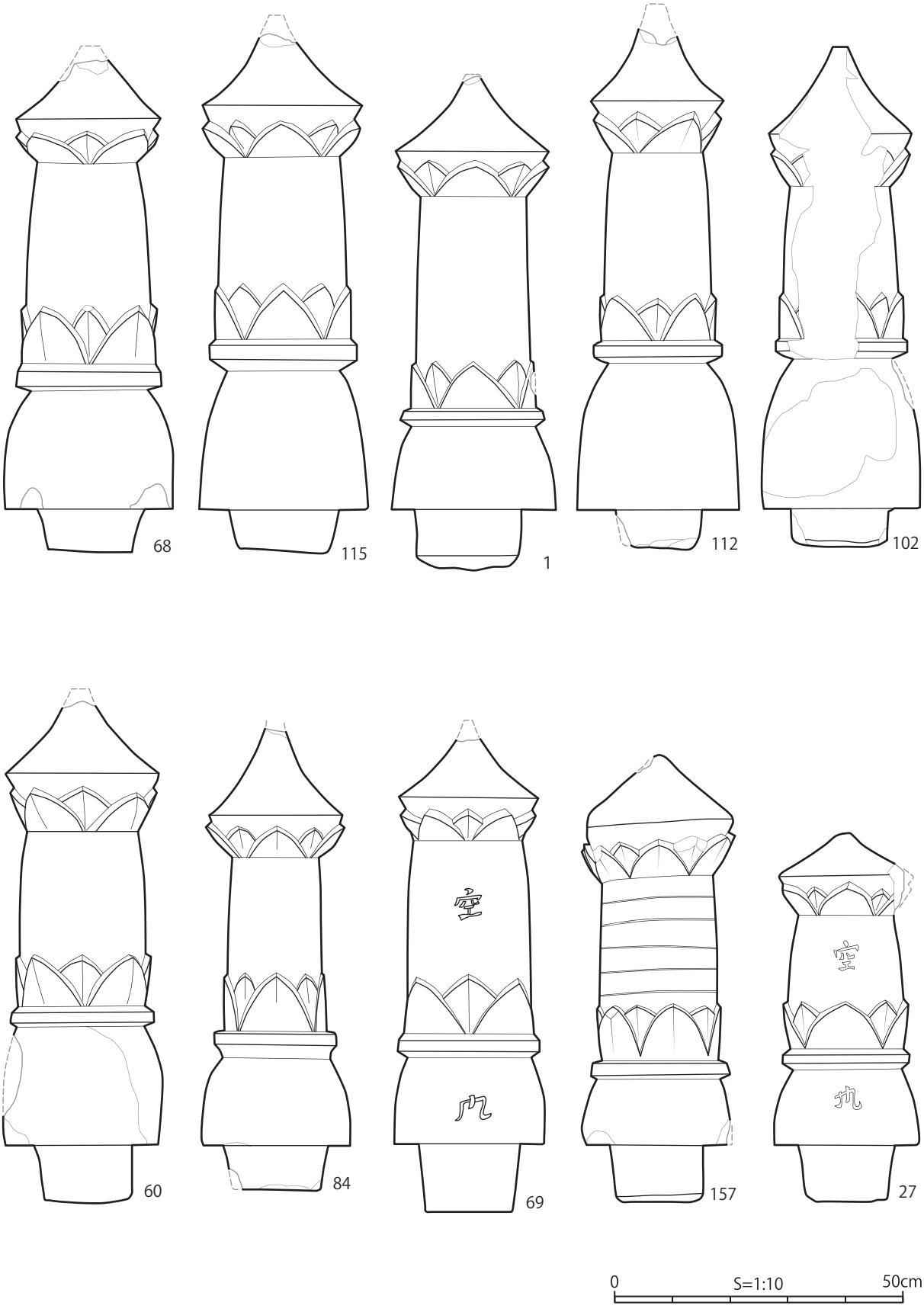
第８図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（１）



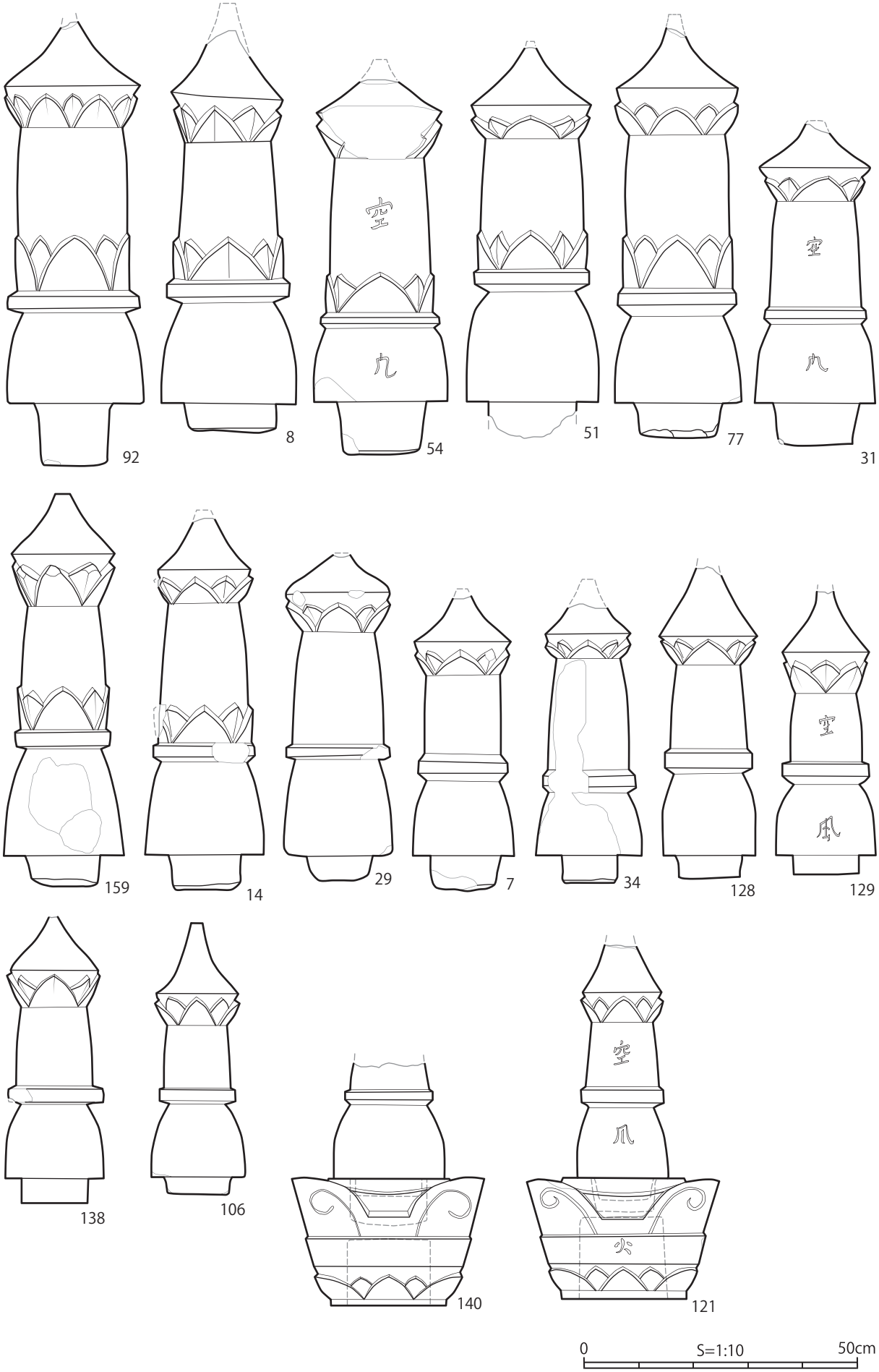
第９図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（２）



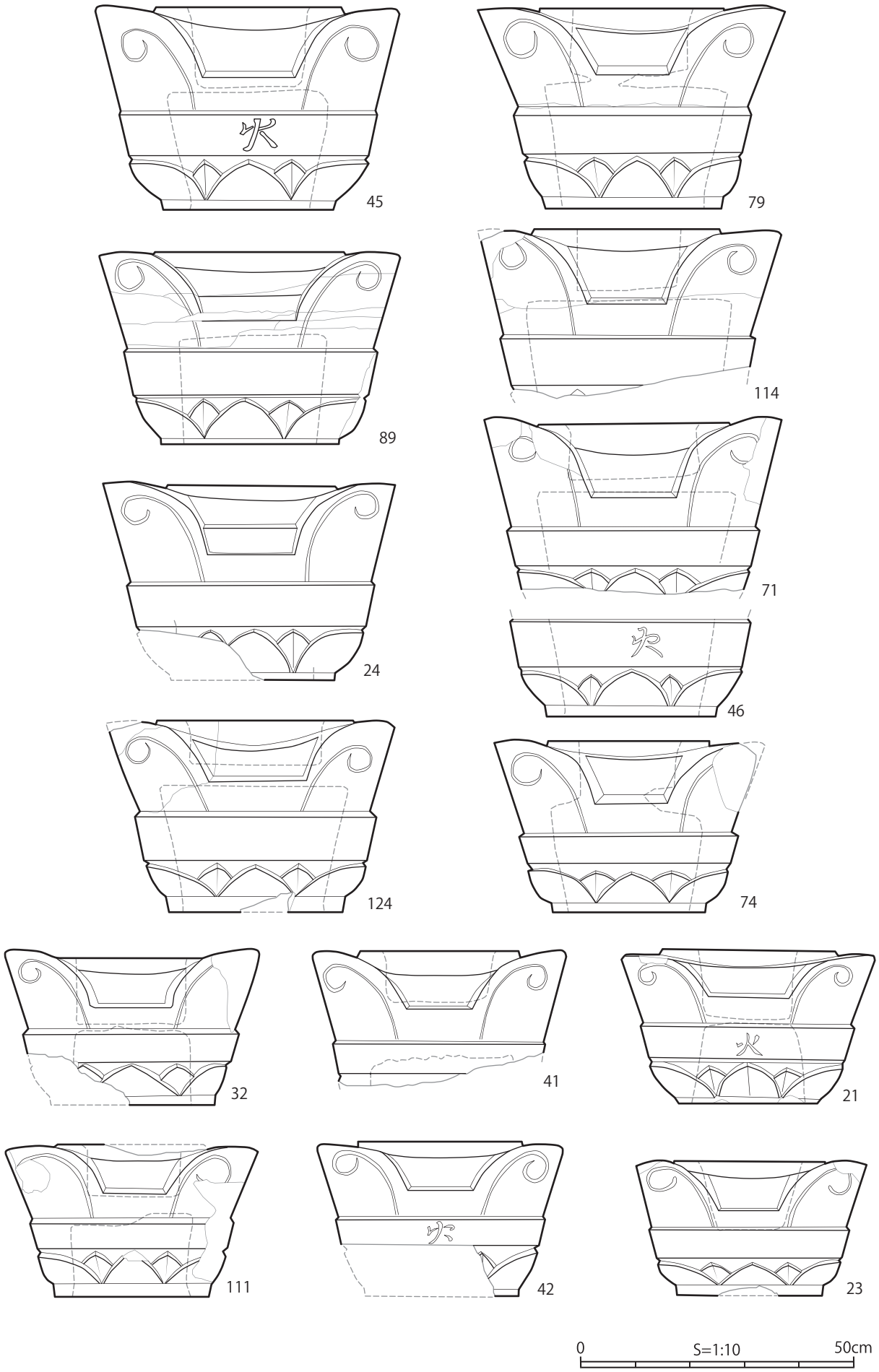
第10図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（３）



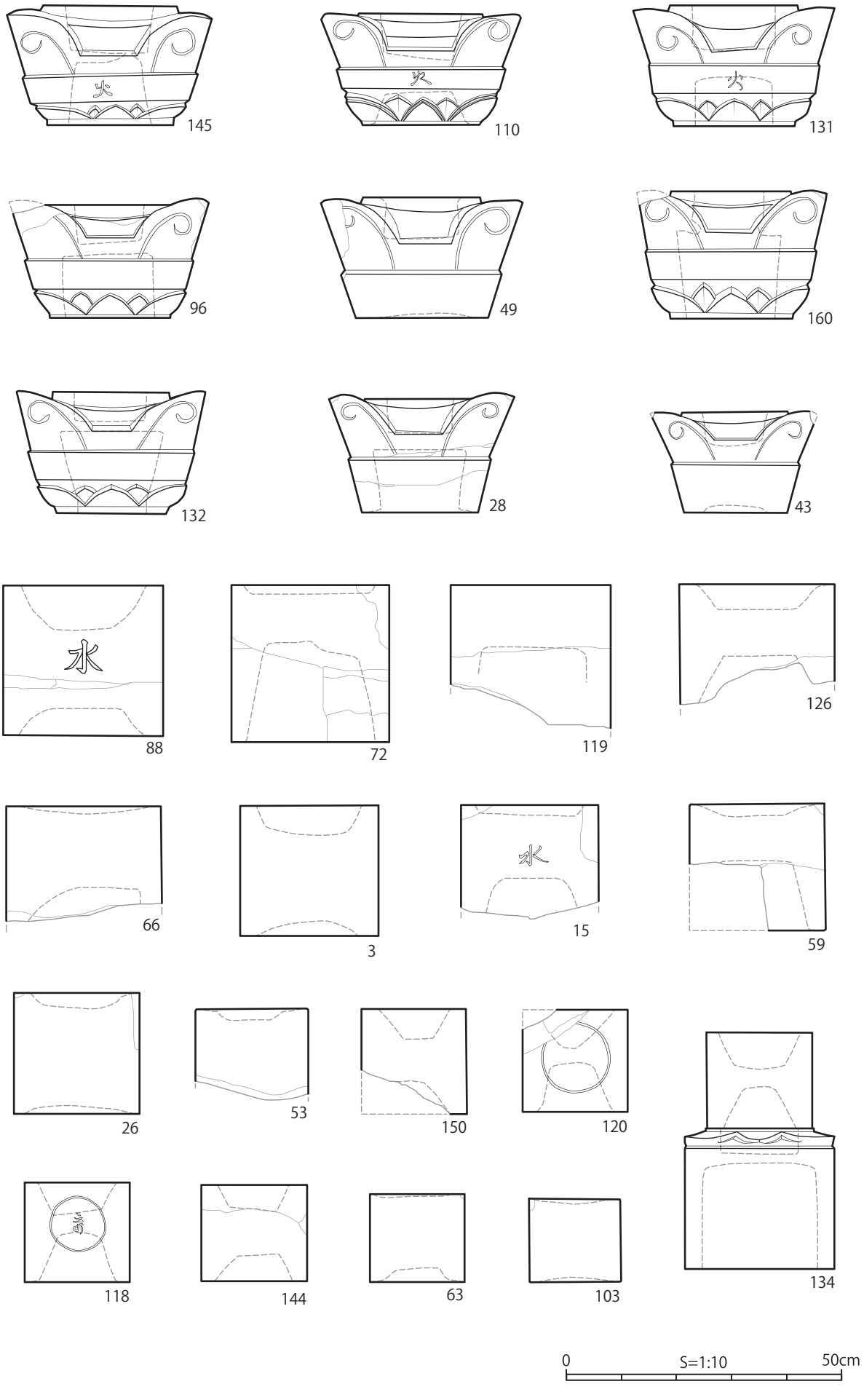
第11図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（４）



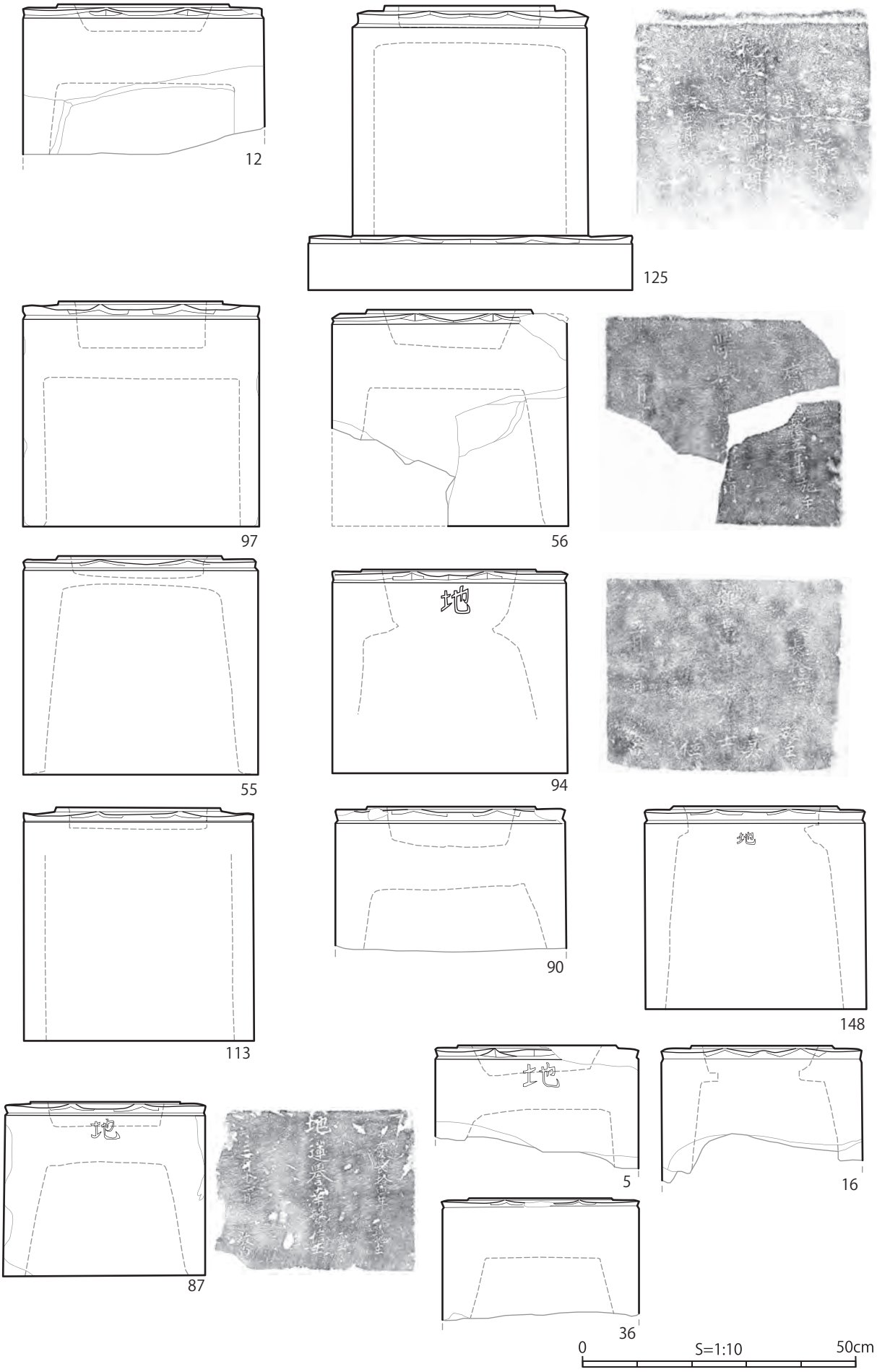
第12図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（５）



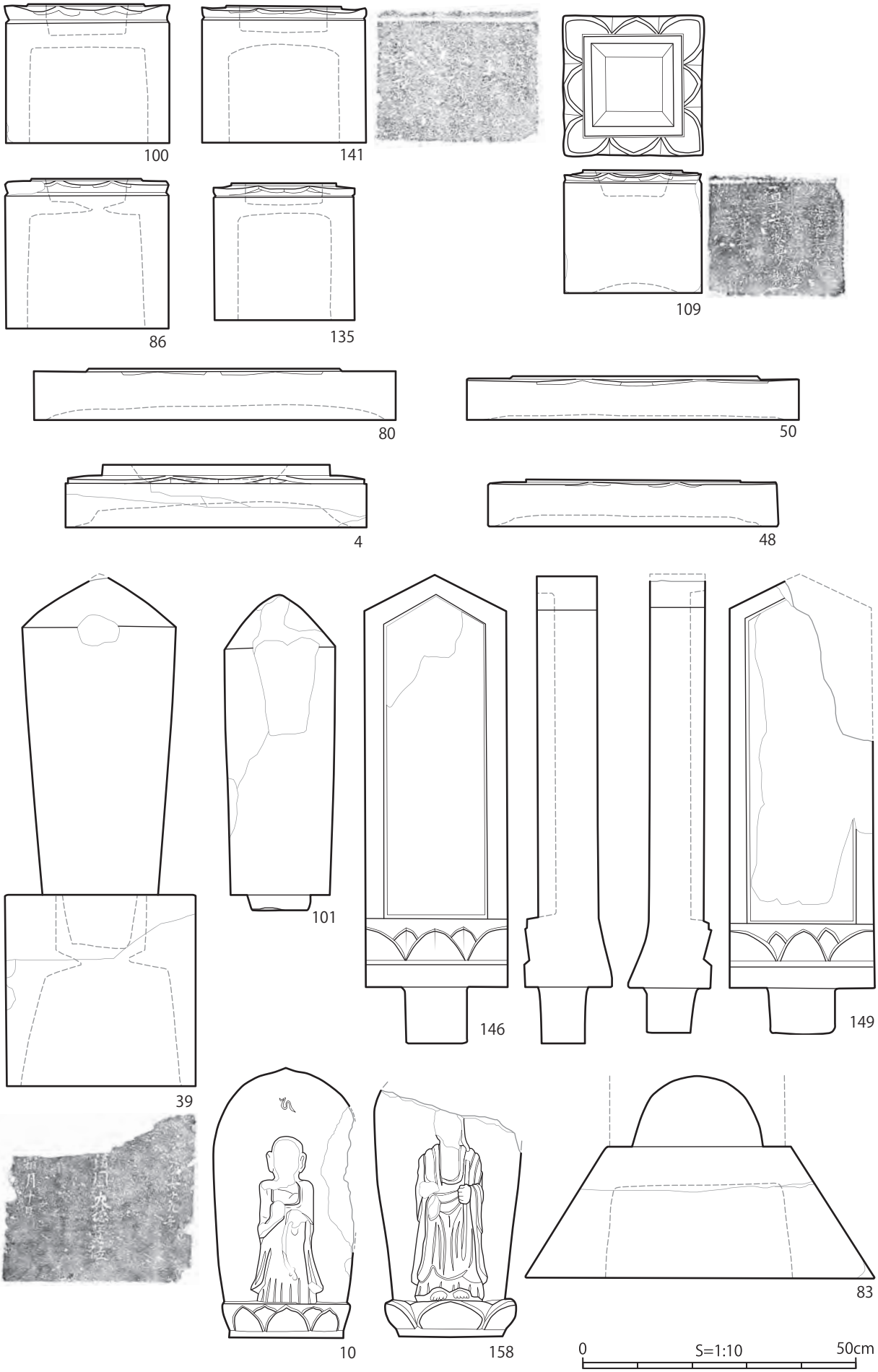
第13図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（6）



第14図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（７）



第15図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（８）



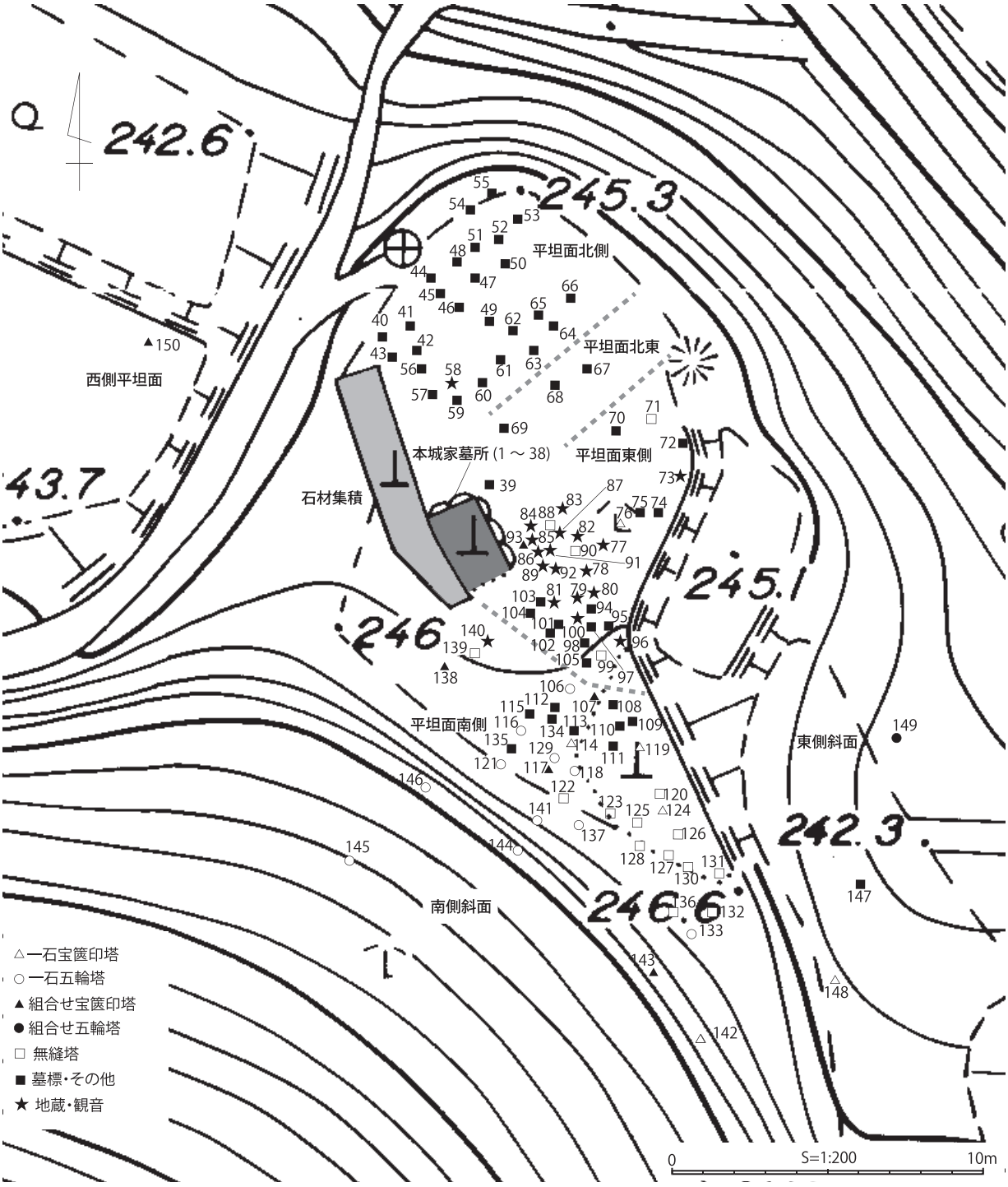
第16図　妙本寺上墓地E地点 石造物実測図（9）

第５章　妙本寺上墓地Ｇ地点の調査

第１節　墓地の立地と石造物の分布

妙本寺上墓地Ｇ地点は、大田市大森町ホ363-2、字名「妙本寺ノ上エ」に所在する。昆布山谷西側で、丘陵中腹の平坦面（標高245～246m）に位置する。ここから約40m南東には長福寺跡がある。

平坦面の中央部には、佐毘売山神社社家の本城家の墓所がある。南北2.72m、東西1.55mの基壇に墓石を集積したもので、中央奥に一石五輪形の



第17図　妙本寺上墓地G地点石造物分布図

供養塔（20）を置き、その左右に５列ずつ墓石を並べている（図版10上）。左側は前列左から順に１～19まで、右側は前列左から順に21～38まで番号を割り振った。

この墓所は、本城家の13代目が他所へ転居したために、墓地を整備し、移霊の祭典を行ったものであることが、供養塔の背面に記されている。なお、これらの中には、本城姓以外に元田姓１基、松原姓６基、矢田姓２基の墓石も含まれており、親類縁者の墓も含めて整理された可能性が考えられる。墓所の北東には12代目によって建てられた灯籠（39）がある。墓所の背後には、墓標基壇の石材が積み重ねられており、整理の際に余ったものを寄せ集めたものとみられる。

平坦面北側では、円頂方柱墓標を主体とする墓石群がほぼ原位置で残っている。

平坦面北東側では墓石は少ないが、平坦面東側に行くと高い密度で分布している。墓標のほかに、石仏が多く、無縫塔も４基見られる。

平坦面南側では、北側・東側と比べて一石宝篋印塔や一石五輪塔がまとまって見られ、無縫塔も７基ある。

G地点の南側の丘陵斜面では、一石宝篋印塔・組合せ宝篋印塔・一石五輪塔（142～146）が点在する。かなり急な地形であるが、石塔のほかに台座や、基壇らしき集石も認められ、南側斜面上にも少しだが墓が造られていたことが分かる。

G地点の東側斜面の裾では３基の石造物が確認された。これらは平坦面から転落したものと考えられる。また、G地点の西側の平坦面では組合せ宝篋印塔の笠が１点認められた。

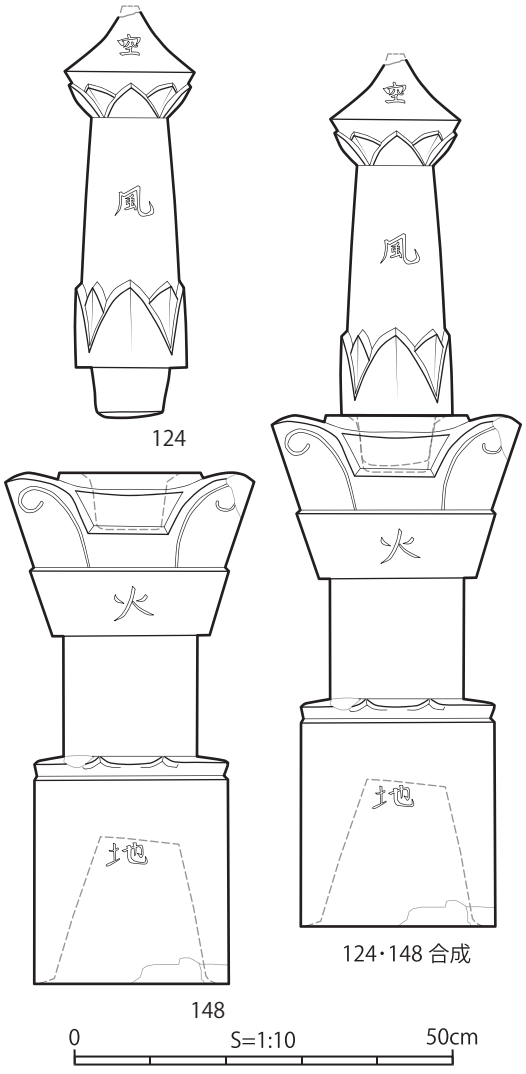
第２節　石造物の様相

石造物の種類と年代

G地点周辺で確認できた墓石は、一石宝篋印塔４基、二石宝篋印塔１基、一石五輪塔11基、組合せ宝篋印塔４基分以上（相輪３点、笠２点、塔身１点）、組合せ五輪塔１基（火・水・地輪各１点）、無縫塔11基（塔身11点、基礎・台座10点）、位牌形墓標７基、円頂方形墓標31基、円頂方柱墓標35基、笠付方柱墓標１基、尖頂方柱墓標１基、平頂方柱墓標３基、欠損等で分類不明の墓標４基、地蔵14基、観音３基である。このほか、灯籠２基、石殿部材とみられるものもある。

一石宝篋印塔は、平坦面東側で１基、平坦面南側で２基、南側斜面で１基確認されている。年代の特定できたものはなかった。

二石宝篋印塔は、相輪（124）と一石で作られた笠から基礎部（148）を組合せるものである。124は平坦面南側で、148は東側斜面の下で確認されており、148は平坦面から転落したことが分かる。124は九輪の下に伏鉢がなく、請花が彫られ、ほぞが作り出されている。148は笠の上面にほぞ穴が穿たれている。剥落により判読しづらいが、



第18図　妙本寺上墓地G地点 二石宝篋印塔

「慶長」の紀年銘が刻まれているようである。

一石五輪塔は、本城家墓所の供養塔を除くと、平坦面南側に 8 基、南側斜面に 3 基存在する。平坦面南側でも斜面裾付近にあるものは、南側斜面から転落した可能性がある。南側斜面にある146には、寛永12（1635）年の紀年銘が認められた。基礎の上部に「經」の文字があり、「妙法蓮華經」と彫られていたと推測される。

組合せ宝篋印塔は、平坦面東側で相輪 1 点、南側で相輪・笠・塔身各 1 点、南側斜面で相輪 1 点、西側平坦面で笠 1 点が確認された。基礎はなく、年代の特定できる資料はない。

組合せ五輪塔は、東側斜面の裾で火・水・地輪が確認されたが、平坦面から転落したものと考えられえる。無銘のため年代は分からない。

無縫塔は平坦面東側で 4 基、平坦面南側で 7 基が確認された。享保15（1730）年から安政 2（1855）年のものまで見られる。

位牌形墓標は、本城家墓所に 2 基、平坦面北東側に 1 基、平坦面東側に 3 基、平坦面南側に 1 基存在する。享保（1716～1735）年間と寛延 4（1751）年のものが認められた。

円頂方形墓標は、本城家墓所に22基、平坦面北側に 3 基、平坦面北東側 1 基、平坦面東側 2 基、平坦面南側に 3 基存在する。紀年銘は、享保 9（1724）年から昭和 3（1928）年まで確認できた。

円頂方柱墓標は、本城家墓所に 8 基、平坦面北側に23基、平坦面東側に 3 基、東側斜面裾部に 1 基存在する。紀年銘は、正徳 4（1714）年から昭和11（1936）年まで認められる。

笠付方柱墓標は、平坦面北東側で確認された。笠部と塔身が一石で作られている。破損のため紀年銘は確認できなかった。

尖頂方柱墓標は、本城家墓所で確認された。明治19（1886）年のものである。

平頂方柱墓標は、いずれも本城家墓所にあり、大正～昭和の年号を持つ。

地蔵は、平坦面北側と南側に 1 基ずつ、平坦面東側に12基存在する。立像は 7 基、半跏坐像は 1 基、坐像が 6 基見られる。紀年銘は、享保19（1734）年から寛政 3（1791）年まで認められた。子どもの戒名が 4 基にあるが、大人の戒名のものも 2 基存在する。観音は 3 基とも平坦面南側で確認された。このうち 1 基（86）は、天明 2（1782）年の紀年銘を持つ。

諡号・戒名

神式の諡号として、「神士」が 4 基、「神女」、「神霊」、「社士」が 1 基ずつ認められた。「神霊」は子どもの墓に用いられている。「神士」の 1 基を除き、いずれも本城家墓所にあった。これらは寛政11（1799）年から安政 5（1858）年にかけて見られる。一方で、この間でも本城家の夫人には、「信女」という仏式の戒名が用いられた例も見られる。明治期になると俗名が墓標に記されていたが、昭和期以降は名前の後に「大人」、「刀自」、「姫」という諡号が用いられている。

「釈〇〇」の法名を持つ浄土真宗の墓は22基確認された。このうち 2 基は平坦面東側と東側斜面の裾部で確認されたもので、残りの全ては平坦面北側に集中している。寛保元（1741）年から慶応元（1865）年の紀年銘が認められる。

「譽号」の戒名や、梵字キリークが彫り込まれた浄土宗の墓は 3 基確認できた。

日蓮宗とみられる墓は、南側斜面上に 1 基ある。寛永12（1635）年の一石五輪塔である。

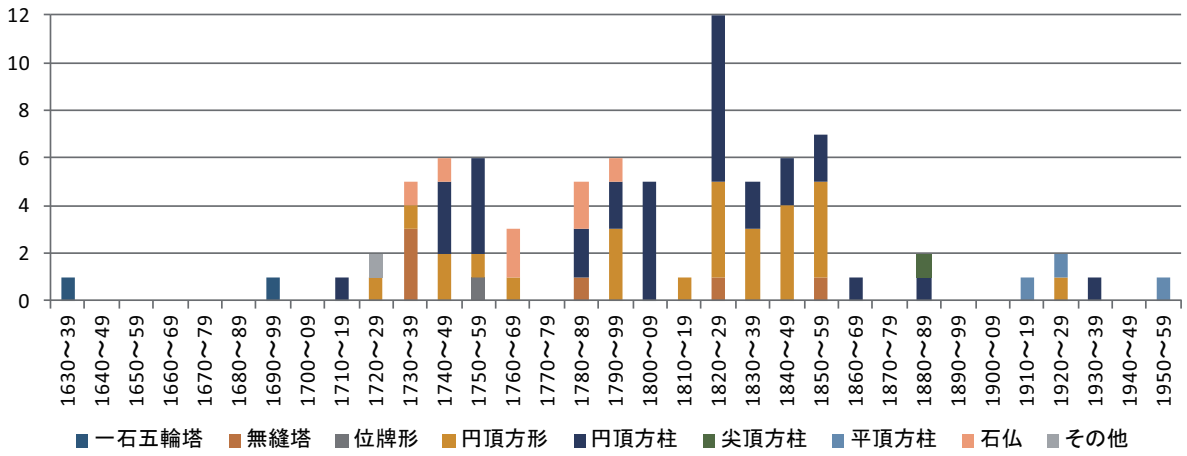
「新歸真」の頭書を持つ墓標は 1 基あり、禅宗の墓と考えられる。

このほか大人の墓で、戒名がある程度判読できたものの、宗派の特定できないものが18基ある。

なお、無縫塔が11基存在するが、中には、天明 7（1787）年銘で「當寺十五代塔」、安政 2（1855）年銘で「當山十八古大和尚禅師」、紀年銘はなく「十二世」の銘を持つものがあった。「大和尚禅師」の号から、禅宗寺院の住職の墓と考えられる。

第 3 節　まとめ

G地点の調査は、実測を行わず、石造物の種別



第19図　妙本寺上墓地G地点の年代別石造物造立状況

や墓碑銘を中心とした調査であったが、石造物の概要や墓地の変遷を把握できた。また、佐毘売山神社社家の本城家の墓所や多数の無縫塔など、神社・寺院との関連性を見出すこともできる。

墓地の変遷

第19図は、紀年銘石造物の形式・年代別点数を示したものである。

G地点周辺で最も古い墓石は、「慶長」元号を持つ二石宝篋印塔で、このほか17世紀代に特定できるものは寛永12（1635）年と元禄４（1691）の一石五輪塔２基のみである。ただし、一石五輪塔、一石宝篋印塔、組合せ宝篋印塔は全部で19基あり、これらは概ね17世紀代に遡るものとみられる。これらの分布状況から、南側斜面や平坦面南側で墓地が形成されたものと考えられる。

18世紀代になると、墓標や石仏（地蔵・観音）が用いられるようになる。1710～1750年代にかけては増加傾向にあるが、その後は1860年代にかけて増減を繰り返しており、銀山地区全体の傾向とは異なっている。明治期以降に造立されたのは本城家の墓石のみで、昆布山谷の集落が衰退したことをうかがわせている。

墓地と宗教・宗派

G地点では神道や、浄土真宗、浄土宗、禅宗、日蓮宗という様々な宗教•宗派の墓が確認された。

佐毘売山神社社家、本城家の墓所などで神式諡号の墓標が７基確認された。これらは18世紀末以降のものである。なお、大森地区にある城上神社社家の墓石調査[(1)]では、「○○命」、「○○命廟」、「○○霊神」、「○○命神霊」といった本城家墓所とは異なる諡号が認められ、神社・社家により葬送儀礼に違いがあったことを示唆している。

浄土真宗の墓は22基確認できたが、ほとんどは平坦面北側に集中しており、他の墓との区分が意識されたように見える。

その他で宗派の特定しうるものは浄土宗３基、禅宗１基、日蓮宗１基で、戒名を判読できたが宗派が不明のものが18基あった。また、住職の墓も含めて11基の無縫塔が確認された。中には「大和尚禅師」と、禅僧をうかがわせるものもあり、G地点の南東約40mにある禅宗寺院、長福寺との関連性が想定される。禅宗の墓は、浄土真宗・浄土宗のものと比べて特徴を捉えがたく、宗派不明とした墓の多くは禅宗の墓の可能性がある。

以上から、E地点では禅宗長福寺に附属する墓地が営まれた一方、いわば棲み分けをするように浄土真宗信徒の墓が造られたと考えられる。また、18世紀末から神社社家で神式諡号が用いられるようになったことで、墓地の中での多様性がより顕著になったのである。

［註］

（1）島根県教育委員会・大田市教育委員会2005『石見銀山遺跡石造物調査報告書５―分布調査と墓石調査の成果―』

第６章　虎岸寺跡の調査

第１節　墓地の立地と石造物の分布

虎岸寺跡は、大田市大森町ニ274、字名「虎岸寺」に所在する。昆布山谷の東側にある、南北37ｍ、東西８ｍ、標高257ｍの平坦面が境内地の跡で、谷筋に面した西側を石垣で区画している。南北にある２基の寺院建物の基壇に挟まれて、石塔の基壇が残っていた。この周辺では、組合せ宝篋印塔の部材や、石仏２基、墓標１基が確認できた。

虎岸寺跡の背後には急な斜面が迫っているが、東側に標高263ｍまで登ったところに南北20ｍ、東西10ｍの平坦面があり、70点余りの墓石が確認された。北側では列状に墓石が配され、本来の位置関係が分かるが、南側の幅が広いところでは墓石が散乱し、原位置はほとんど分からない。戒名が削られた墓石も多く見られる。この南東へ２ｍ程登ったところにも平坦面がある。現状では石造物はないが、ここから転落したとみられる石造物も存在する。

境内東側の墓地から15ｍ北側、標高264～265ｍの位置にある平坦面周辺では墓標２基、地蔵の基礎１基、台座２点、さらにその下の標高約260ｍの平坦面では地蔵の基礎１基が確認された。

第２節　石造物の様相

石造物の種類と年代

虎岸寺跡とその背後の墓地では、一石五輪塔１基、組合せ宝篋印塔１基、位牌形墓標１基、円頂方形墓標27基、円頂方柱墓標28基、突頂方柱墓標１基、地蔵12基（像12点、基礎６点）以上、観音２基を確認した。

一石五輪塔（26）は、享保５（1720）年の銘を持つもので、この地点では最も古い石塔である。

組合せ宝篋印塔は、境内地の石塔基壇周辺で確認されたものである。転倒して部材が散乱していたが、全体の組み合わせは復元できる。切石積みの基壇上に、２つの切石を組み合わせて基壇最上部をつくり、その上に正方形の板石、上下に蓮弁が彫られた台座を置き、基礎から相輪までを組み合わせるものである。笠が大きく開き、塔身には蓮華文や月輪が陽刻され、その内側に金剛界五仏種子の梵字が刻まれている。石材は福光石である。基壇最上部の石材には銘が彫られており、「興中」のあとに８人の名前が、そのあとに「法□施主」の丸茂久右衛門の名前と「享保十一（1726）年三月吉日」の日付が見える。丸茂久右衛門は、享保13年に銀山附役人の組頭・銀蔵役・諸役所立会を勤めていたことが山中家文書に記されている[(1)]。なお、丸茂以外の８人の名前は削られていて、明確には判読できない。

位牌形墓標は、享保６（1721）年の紀年銘が確認された。風化が著しいため明確ではないが、正面の枠取り中に地蔵が彫られているようである。

円頂方形墓標は、宝暦10（1760）年から明治25（1892）年、円頂方柱墓標は、寛保２（1742）年から明治45（1912）年にかけて見られる。突頂方柱墓標は、明治41（1908）年のものである。

地蔵は、寛延２（1749）年から文政２（1819）年のものが確認された。子どもの墓が７基と多いが、大人の墓も３基で確認できた。12基のうち１基（78）のみ立像で、ほかは坐像である。78は、平板的な像形で、このようなものはあまり例を見ない。石塔基壇周辺にあったものである。

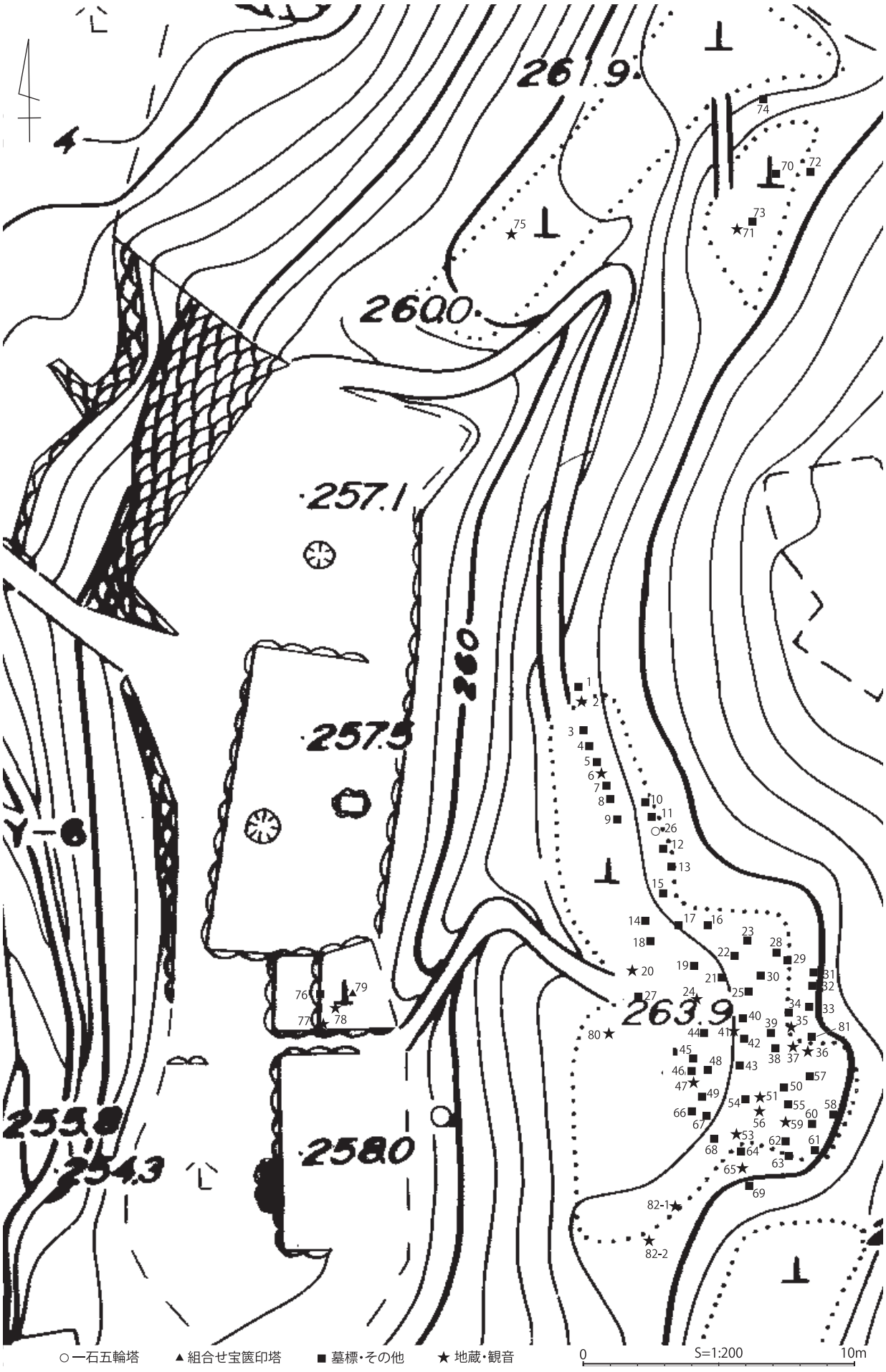
観音は２基とも「信女」の戒名を持つ。このうち１基に明和９（1772）年の銘が確認された。

戒名・法名と宗派

「釈○○」という浄土真宗の法名を持つ墓が25基あり、このうち20基が円頂方柱墓標、５基が地蔵である。

梵字キリークや、「譽号」戒名を伴う浄土宗の墓は、８基を確認している。

また、戒名は判読できるが宗派の不明な墓は、７基あった。史料では虎岸寺は禅宗と記されており、これらは禅宗の墓の可能性がある。



第20図　虎岸寺跡石造物分布図

このほかに戒名が打ち欠かれていて、宗派が特定できない墓も多く存在する。

第３節　まとめ

墓地の変遷と性格

第21図に、紀年銘石造物の形式・年代別点数を示した。最も古いものは享保５（1720）年銘の一石五輪塔だが、これ以降は墓標が主体に造立される。また、18世中頃から19世紀初め頃までは石仏も墓石に使用されている。造墓数は、18世紀前半から19世紀初頭にかけて波はあるものの増加傾向で、その後は19世紀中頃に向けて減少し、19世紀後半以降は極めて低調である。これまでの石造物調査の傾向と概ね対応するものといえる。

文献史料では虎岸寺は禅宗寺院として記録されているが、石造物には浄土真宗や浄土宗の墓が多数認められ、共同墓地的な様相が窺われる。木曽家文書の絵図（図版１）では、虎岸寺の背後（東側）は他人の所有地となっている。元々、寺の所有地でなかったため、寺の管理が及ばなかったのかもしれない。なお、明治期の早い段階で虎岸寺は廃寺となるが、背後の墓地では明治末年まで造墓が行われている。

組合せ宝篋印塔について

今回の調査では、地役人の丸茂久右衛門ほか８人によって建てられた組合せ宝篋印塔が確認された。この宝篋印塔は、石見銀山で近世前期に一般的に見られるものとは、大きく形態が異なるもので、別系譜のものと考えられる。これと類似するものは、栃畑谷地区字甚光院の愛宕社[2]や温泉津地区の金剛院墓地[3]で確認されている。また、羅漢寺には、同様の形態で、花崗岩製の宝篋印塔がある。この塔は、江戸湯島にある霊雲寺の光海によって、田安宗武とその夫人の供養塔として、明和８（1771）年に建立されたもの[4]であることから、中央の石塔型式と考えられる。虎岸寺跡の宝篋印塔はこれよりも古いもので、いち早く中央の型式を取り入れて製作されたものと評価できる。

この石塔は、特定個人の墓ではなく総供養塔として造立されたものと推測され、地役人と地域社会、寺院との関わりを考える上で注目される資料である。

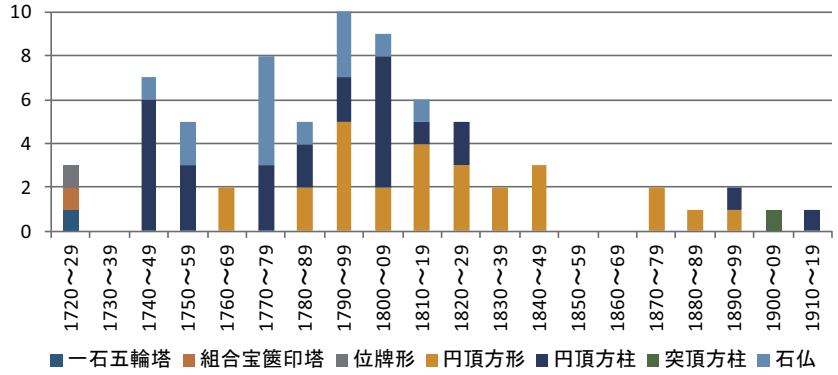
［註］

（1）島根県教育委員会2005『石見銀山歴史文献調査報告書　石見銀山附地役人由緒書』

（2）島根県教育委員会・大田市教育委員会2014『石見銀山遺跡石造物調査報告書14―栃畑谷地区字甚光院の石造物調査―』

（3）島根県教育委員会・大田市教育委員会2010『石見銀山遺跡石造物調査報告書10―金剛院墓地・本谷地区周辺・中正路の石造物―』

（4）鳥谷芳雄2004「羅漢寺五百羅漢の造立棟札」『石見銀山ノート３』島根県教育委員会・大田市教育委員会



第21図　虎岸寺跡の年代別石造物造立状況

					挿図番号
82	81	80	79	78	報告番号
地蔵	円頂方柱墓標	地蔵	組合せ宝篋印塔	地蔵	種別
					高さ
					最大幅
（正面）明和八卯 釈〇〇童子 □ 十一月六日	正面）□（釋カ）［　］信士 右面）安永三甲午 三月一日 左面）俗名多平 為三郎 父		基壇） 興中 □□□□ 〇〇□□（喜平カ）次 □□十郎 □□□□□ 〇□□□□（良） □□□（三カ）之丞 □（茂カ）右衛門 同　藤八 法□施主 丸茂久右衛門 享保十一午年 三月吉日		銘文
上の段から転落したものか。基礎（1）に銘文を持つ。像（2）は蓮華座に載る坐像。	正面枠取り、陰刻の蓮華文。戒名削られる。	蓮華座に坐る像	切石積みの基壇上に立てられていた。基壇に銘があるが、人名が削られている。塔身の2面の月輪内に梵字「アク」ーキリーク」が彫られており（ほか2面は削られて判読不能）、金剛界五仏を表すものと考えられる。	光背を伴う立像。頭部欠損。下部に蓮華座を伴い、像形は平板的。ほぞあり。	備考
1771	1774		1726		西暦

凡　　例

- 石見銀山遺跡の昆布山谷地区に所在する妙本寺上墓地Ｅ地点・Ｇ地点及び虎岸寺跡の石造物を掲載した。
- 各石造物の規模は基本的に高さ及び最大幅をセンチメートル単位で掲載した。欠損している場合は残存している規模を（　）内に記載した。
- 複数部材からなる石造物の高さは、上の部材の高さ＋下の部材の高さ、最大幅は、上の部材の最大幅／下の部材最大幅、と記載した。
- 銘文は戒名が書かれている面を正面とし、向かって右側を右面、左側を左面、反対側を背面としている。複数の面に銘を持つ場合は、正面）…　右面）…　と記載している。
- 銘文の欠損等は、文字の個数がわかる部分は□□、判読不明部分及び文字の存在が推定される部分は［　］で示し、銘文の上下が欠損して字数が不明な場合は　（上欠）］、［　（下欠）と示した。また推定できる文字は□の後に（　ヵ）と表示した。
- 戒名及び名字は基本的に伏字で〇〇とした。
- 実測図を掲載していない石造物についても一覧表に掲載し、今後の研究の資料とした。
- 写真図版及び挿図の個別番号は一覧表の番号に対応する。

挿図番号									
報告番号	60	61	62	63	64	65	66	67	68
種別	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵（基礎）	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標
高さ									
最大幅									
銘文	正面）釋〇〇 右面）寛延二巳 左面）四月八日 俗名 〇〇善九口（郎カ）	正面）口（釋カ）〇〇 右面）寛延二巳己 左面）三月十日 俗名宗右子門	右面）文政二卯 閏四月十九日 左面）俗名喜代太ㄱ 〇〇七三郎 立之	正面）〇誉口［ ］口（女カ） 右面）文政七申八月十七日 左面）俗名ヲハヤ 〇〇七三郎母	正面）〇誉〇〇信女 右面）天保九戌閏四月二十六日 左面）俗名カヨ 〇〇三代蔵立之	正面）寛政三亥 〇〇孩児 左面）口（二カ）月十九日 〇〇忠七子	正面）釈口口 右面）寛保二戌 左面）十一月二十七日 俗名佐兵衛 十一口	正面）〇〇童女 右面）弘化四未 三月廿四日 左面）七三郎子 ヲカヨㄱ	正面）口〇〇〇信士 右面）天明四辰八月廿九日 左面）俗名〇〇藤四郎
備考	正面枠取り。下部に陰刻の蓮華文。	正面枠取り。下部に陰刻の蓮華文。	正面枠取り内に地蔵立像が彫られる。側面下部が厚くなる。	戒名の下部削られる。陰刻の蓮華文。	下部に陰刻の蓮華文		枠取りあり。戒名打ち欠かれている。		正面枠取り、陰刻の蓮華文。
西暦	1749	1749	1819	1824	1838	1791	1742	1847	1784

挿図番号									
報告番号	69	70	71	72	73	74	75	76	77
種別	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	地蔵（基礎）	台座	台座	円頂方柱墓標	地蔵（基礎）	円頂方柱墓標	観音
高さ									
最大幅									
銘文	正面）［ （欠損） ］ 右面）宝暦三酉天 左面）口［（下欠）	正面）〇［ ］口（女カ） 右面）享和元酉 左面）十二月廿三日	正面）宝暦七丑 〇 釈 〇 正月十日	上面の界線内に「二」の文字。楕円形の水入れが彫られる。	上面の界線内に「四」の文字。	正面）釈尼〇〇 右面）文化二丑 三月廿五日 左面）俗名ハナ タケ母 タケ立之	正面）天明辛丑 童 釈〇〇 子 十月二十八日 左面）和三良子 忠二郎 施主ヲイシ	正面）〇誉〇〇〇信女 右面）文政七申 八月十八日 左面）俗名ヲハヤ 〇〇七三郎母	正面）口口元 口誉口口信女 左面）［ ］口（廿ヵ）七才 施主 〇〇吟三郎
備考	頂部、側面のみ丸くなる。正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。戒名削られ、正面左側は欠損。	ほぞあり。正面枠取り。		上面の界線内に「四」の文字。		戒名のまわりに界線。下部に陰刻の蓮華文。			基礎に銘文。蓮華座の上に右膝を立てて坐る。
西暦	1753	1801	1757			1805	1781	1824	

挿図番号									
報告番号	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
種別	地蔵（基礎）	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	地蔵	位牌形墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標
高さ										
最大幅										
銘文	正面）寛延二巳 〇〇□［（下欠） 十月［（下欠）	正面）〇□□□（孩児ヵ） 右面）文化二年丑十一月六日 左面）施主コブ山谷長松	正面）〇〇〇〇信女 右面）文政五午九月十六日 左面）施主〇〇七三郎 妻ヲタミ「	正面）□□（釈尼ヵ）□□ 右面）文化二乙丑 閏八月三日 左面）俗名おそめ	正面）〇〇〇□□（信ヵ）女 右面）文化八辛未四月五日 左面）俗名おさよ 施□（主ヵ）□〇伊三郎	正面）［　　］ 右面）文化五戊辰 左面）三月廿八日 〇〇銀十郎子		（上欠）］保六□（丑ヵ） （上欠）〇〇 （上欠）七日	正面）□□［　　］ 右面）宝暦四甲戌天 十二月□（十ヵ）六日 左面）□□（俗名ヵ）□□ 二十七才 施主 施主〇〇吟三郎	正面）［（欠損）］ 右面）□（寛ヵ）政二戌天 二月廿二日 左面）〇〇忠七立之
備考	左下側欠損	正面下に陰刻の蓮華文。戒名削られている。	下部に陰刻の蓮華文	戒名削られている。正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。	戒名の周囲に界線。下部に陰刻の蓮華文。反花のある台座を伴う。	頂部側面のみ丸くなる。戒名削られる。正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。	頭部欠。蓮華座の上に坐る像。	正面側は大部分が欠損。正面枠取りしており、内側には地蔵が彫られていた可能性がある。下端にほぞ。	正面中央欠損。枠取り、下部に陰刻の蓮華文。	戒名削られる。正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。52と接合。
西暦	1749	1805	1822	1805	1811	1808		1721	1754	1790

挿図番号									
報告番号	51	52	53	54	55	56	57	58	59
種別	地蔵	欠番	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵（基礎）	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	地蔵
高さ									
最大幅									
銘文	正面）（上欠）］童子		正面）文政二卯 〇〇孩児 閏四月十□（二ヵ）日 左面）俗名ヲ□□ 〇〇七三郎 立之	正面）［（欠損）］ 右面）□□（宝暦ヵ）十辰天 左面）［　　］廿□日 ［　　］辰三郎	寛政五丑天 キリーク　〇〇〇〇信士 九月十六日	安永五申 釈尼〇〇 八月廿四日	正面）釈〇〇 右面）寛政十一未 二月十一日 左面）俗名喜惣太 虎之亟 父	正面）　　信 ［　］□〇 右面）　　士 左面）寛保三癸亥天 正月廿一日	正面）寛政五丑天 〇〇孩児 十一月廿五日 右面）ヲルモ 左面）〇〇七三郎 妹
備考	蓮華座の上に坐る像。光背に銘文。		基礎に銘文。	3つ以上に割れている。戒名削られている。正面枠取り。	花崗岩。正面枠取り。		陰刻の蓮華文	頂部、側面のみ丸くなる。正面枠取り。戒名上部削られる。	頭部欠損。
西暦			1819	1760	1793	1776	1799	1743	1793

挿図番号	23	24	25	26	27	28	29	30	31
報告番号	円頂方柱墓標	地蔵	円頂方形墓標	一石五輪塔	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
種別									
高さ									
最大幅									
銘文	正面）釋〇〇 右面）文政十一年 子二月二日 左面）俗名カル〻 〇〇弥右ヱ門	宝暦三酉天 〇〇童子 五月十日	正面）〔（欠損）〕 右面）寛政十戊午九月十日 〇〇伊三太〻 左面）〇〇常吉立之	火輪）梵字キリーク 地輪）享保五年 口誉口〇口口（居士カ） 子十二月廿二日	正面）〔　〕口（士カ） 右面）明和二乙酉 口口口口口 （十一月十七日カ） 左面）俗名〇〇金治郎 十九才	正面）口（釋カ）〔　〕 右面）文化三丙寅二月十二日 左面）俗名惣助 〇〇廣兵衛	正面）〔（欠損）　〕 右面）文政九年 戌八月〔（下欠） 左面）口口（俗名カ）口（ムカ）ラ 〻 施主〇〇弥右ヱ門	正面）釋尼〇〇 右面）文化九壬申 三月十三日 左面）俗名おきそ 施主〇〇廣兵ヱ	正面）釋〇〇 右面）安永八亥 左面）二月廿日
備考		蓮華座に坐る像。基礎に銘文。	下部に陰刻の蓮華文		正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。下端にほぞ。	正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。	正面全体欠損	下部に陰刻の蓮華文	正面枠取り
西暦	1828	1753	1798	1720	1765	1806	1826	1812	1779

挿図番号	32	33	34	35	36	37	38	39	40
報告番号	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	地蔵	地蔵（基礎）	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標
種別									
高さ									
最大幅									
銘文	正面）釋〇〇 右面）文化五戊辰 三月九日 左面）俗名佐兵衛〻 〇〇兼松 立之	正面）尼〇〇 釋 〇　〇 右面）寛政十二申十月八日 左面）寛政七卯九月十一日	正面）口（釋カ）〔　〕童 女 安永五丙申 十二月八日	正面）寛政四子 三月四日 左面）宗助 立之	正面）安永七戌 釈〇〇信女 八月廿八日	正面）寛政十二申 〇口童子 十月五日 俗名淺蔵 四才口（卒カ）	正面）〇〇孩児 右面）文化十二亥 九月廿二日 左面）長松子	正面）〇〇孩児 右面）天保九年戌 三月四日 左面）長治郎子	正面）口（釈カ）口〇 右面）口（延カ）享元子 左面）口（十カ）二月十日 俗名久右衛門
備考	正面枠取り。下部に陰刻の蓮華文。		戒名打ち欠かれている。正面枠取り。	基礎と像が一体でつくられている。		蓮華座の上に坐る像。基礎と像が一体に作られている。基礎に銘文。	陰刻の蓮華文	陰刻の蓮華文	正面枠取り。正面上部欠損。
西暦	1808	1795/1800	1776	1792	1778	1800	1815	1838	1744

挿図番号								
報告番号	6	7	8	9	10	11	12	13
種別	観音	円頂方形墓標	円頂方形墓標	突頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標
高さ								
最大幅								
銘文	明和九辰天 ○譽○○信女 十一月八日	正面）○□□□信士 右面）○○七三郎 左面）嘉永二酉四月十八日	正面）（上欠）」童子 右面）明治十二年 □月廿六日 左面）○○亀太郎子 恒三郎「年六才八ヶ月	正面） ○○○○信士 ○○○○○信女 右面） 明治四拾壱年七月二日午后四時死亡 ○○亀市實父 ○○亀太事 行年七十二才 左面）○○亀市實母 俗名ヨネ「 行年	正面）□○○□（信ヵ）女 左面）九月五日	正面）釋□□ 右面）寛政元酉 左面）○○忠七□ 父	正面）釈○○ 右面）宝暦八戊寅 左面）十月八日 惣助立□（之ヵ）	正面）釈○○ 右面）天明五乙巳 左面）五月五日 惣助立之
備考	蓮座の上に右ひざを立てて坐る像。基礎に銘文		下部に陰刻の蓮華文	正面最上部に家紋。その下に梵字バク（釈迦如来の種子）	戒名打ち欠かれている。墓標正面、枠取り。	戒名は打ち欠かれている。正面、枠取り。	右上欠損。正面、枠取り。13と同じ台座の上に載る。	正面上部欠損。枠取りあり。
西暦	1772	1849	1879	1908		1789	1758	1785

挿図番号								
報告番号	14	15	16	17	18	19	20	21	22
種別	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	地蔵	円頂方形墓標	円頂方形墓標
高さ									
最大幅									
銘文	正面）梵字ア　○○○○信士 右面）明治四十五年 四月廿八日死 左面）俗名○○亀市事 行年四十七才 ○○亀太長男 仝　ブン夫	正面）□（釋ヵ）○○ 右面）寛保三癸亥 左面）十月廿六日 惣助立之	正面）［　　］ 右面）寛政六寅 左面）十一月十九日 ○○禮次郎事	正面）（上欠）」信士 右面）明治十一寅十二月五日 左面）○○長次良「	正面）［　　］□（女ヵ） 右面）寛政十午ノ 左面）九月廿日 俗名ヲシ□	正面）［　文化十二乙亥　］ 右面） 六月十六日 左面）俗名長松年三十五才 施主栄蔵		正面）［（欠損）］ 右面）天保十五年 辰四月二十一日 左面）俗名□□□ 行年三才	正面）○○○○信士 右面）明治十三年一月廿一日 左面）○○啓次「
備考	正面最上部に家紋。	戒名の一番上の文字が打ち欠かれている。正面枠取り。	戒名削られている。正面枠取り。下部に蓮華文	正面上半部欠損。下部に陰刻の蓮華文。	戒名削られている。正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。側面下部は厚く作られている。	戒名削られている。正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。	頭部欠損。蓮華座の上に坐像。	正面全体的に欠損。下部に陰刻の蓮華文。	3つ以上に割れている。陰刻の蓮華文。
西暦	1912	1743	1794	1878	1798	1815		1844	1880

挿図番号											
18											
報告番号	148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138
種別	二石宝篋印塔（笠～基礎）	円頂方柱墓標	一石五輪塔	一石五輪塔	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	一石宝篋印塔	一石五輪塔	地蔵	無縫塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（笠）
高さ	67.5	33.5	(60.5)	64	20.5	45	76.5	(43)	(32.5)	57	23.5
最大幅	33	19.5	16	16	(56.5)	17.5	23.5	16	(21)	26	39.5
銘文	□□□□居士□［(下欠) 火　□（水ヵ）　地 □（于ヵ）時□□（慶長ヵ）［　］ 四月三日孝子敬白	正面）釋□○ 右面）寛保元酉 左面）二月七日 ○○吉松弟 俗名松之助	□□□□經 正面）寛永十二乙亥 □□○○○霊 □也 九月晦日	火輪）卍 地輪）［　］ 亥之十月十二日	火 水 □（地ヵ）			火 水 地　○○禅尼 敬白 戌之七月四日			
備考	上方から転落したもの。笠の上面にほぞ穴が穿たれている。124と組み合わさる可能性が高い。	上方から転落したものか。正面が枠取りされ、下部に陰刻蓮華文を持つ。	空風輪の先端欠損		空風輪欠損	伏鉢上部には請花を持たない。		空風輪欠損	坐像。頭部及び体部右側1／3が欠損。		
西暦	1596～1615	1741	1635								

虎岸寺跡の石造物

挿図番号					
報告番号	1	2	3	4	5
種別	円頂方柱墓標	地蔵	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標
高さ					
最大幅					
銘文	正面）釋○○信女 右面）寛政六寅年 九月十三日 左面）俗名ヲサヨ 十九才	安永二癸巳 ○譽○□信士 十月□（廿ヵ）二日	正面）○○孩女 右面）明治廿八年一月十日 左面）○○亀市 長女	正面）［（欠損）］ 右面）俗名□□七三郎 ［　］立之 左面）天明五□（巳ヵ）天 十二［（下欠）	正面）○□童子 右面）明治廿五年 八月廿七日 左面）○○亀太郎子 国市［事年十二才
備考	戒名の周囲に界線。下部に蓮華文を陰刻	蓮華座に坐る像。基礎に銘文。		2つ以上に割れている	下部に陰刻の蓮華文
西暦	1794	1773	1895	1785	1892

挿図番号		
報告番号	149	150
種別	組合せ五輪塔（火輪・水輪・地輪）	組合せ宝篋印塔（笠）
高さ	22.5＋20＋24	32.5
最大幅	35.5/29.5/26	49
銘文		
備考	上方から転落したものと考えられる。	
西暦		

												挿図番号
123	122	121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	報告番号
無縫塔（塔身）	無縫塔（基礎）	一石五輪塔	無縫塔（塔身）	一石宝篋印塔	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	一石五輪塔	石殿（屋根）	一石宝篋印塔	円頂方形墓標	位牌形墓標	種別
48	21	(37.5)	60	(70)	(52)	(41)	(45)	21	(61)	54	(37)	高さ
26.5	24	15	32	23.5	19.5	20.5	20	(44)×30.5	23	22	41.5	最大幅
文政十亥年 〇〇〇〇 四月九日		正面）為〇〇□（童カ）女 刻石塔□□□ □□□（石カ）也 □□二□　施主 敬白		□□□□信女 □□三□年 八月十日	正面）［　］□□（居士カ） ［　］之七月□日				正面）地 ［　］也 ［　］月十二日	正面）〇［　］ 右面）延享二乙丑天 左面）五月二日	正面）〇［（下欠） □□	銘文
ほぞ（長7㎝×径10・5㎝）持つ。	123に伴う。ほぞ穴（径11㎝）あり。	空風輪欠損。	ほぞ（長8㎝×幅11・5㎝）あり	相輪・笠・塔身・基礎に「空」、「風」、「火」、「水」、「地」と刻まれる。	空風輪欠損。火輪に「水」、水輪に「地」と刻まれる。	九輪から上部のみ残存、伏鉢は欠損。	地輪欠損	長辺側が欠損	相輪の九輪から上は欠損。笠・塔身・基礎に「火」、「水」、「地」と刻まれる。		正面枠取り	備考
1827										1745		西暦

												18	挿図番号
137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	報告番号
一石五輪塔	無縫塔（塔身）	石殿（屋根）	灯籠（竿石）	一石五輪塔	無縫塔（基礎）	無縫塔（塔身）	無縫塔（基礎）	一石五輪塔	無縫塔（基礎）	無縫塔（塔身・基礎）	無縫塔（基礎）	無縫塔（塔身）	二石宝篋印塔（相輪）	種別
(22.5)	50.5	18.5	(15)	(24)	25	54.5	24	(20)	14	69＋15	27.5	57	47	高さ
29.5	21.5	(31)	18	(17)	28.5	22	25.5	(16.5)	36	31.5/48	41	25	16	最大幅
					十二世□□□大和尚 正月□□日	卍	正面）天明七未年 當寺十五代塔 十月廿四日				正面）□［（下欠）		空 風	銘文
地輪が縦に2／5程度残存。下部の横側が台状に広がっている。	130と組み合わさる。ほぞ（長4・5㎝×径6・5㎝）を持つ。	灯籠の笠の可能性もある	平面、円形の台石と組み合わさる。台石は埋没し、上面のみ確認。	空風輪のみ	ほぞ穴（深3㎝×径12・5㎝）あり。	132と組み合わさる。ほぞ（長2・5㎝×径11㎝）を持つ。	136に伴う。ほぞ穴（径8㎝）あり。	空風輪のみ残存	ほぞ穴（径13㎝）水入れあり		ほぞ穴（19㎝×19・5㎝）	ほぞ（長5㎝、径11・5㎝）	148と組み合わさる可能性。ほぞ（長6㎝×径10㎝）。伏鉢を省略した形式。	備考
	1787						1787							西暦

										挿図番号
101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	報告番号
位牌形墓標	地蔵	無縫塔（塔身・基礎）	石殿（屋根）	円頂方柱墓標	地蔵	位牌形墓標	不明墓標（羽子板形）	組合せ宝篋印塔（相輪）	地蔵（像・基礎）	種別
62	(27)	59＋24.5	17.5	41	32.5	(70)	(45.5)	50	(22.5)＋19.5	高さ
38	15	24.5/27	47×30	19	20.5	40	26	17.5	20.5/23	最大幅
		塔身正面）當山十八世大和尚禅師 基礎正面）宝塔 基礎右面）安政二年　乙卯 基礎左面）五月　廿日		正面）［　］〇〇信女霊 右面）正徳四□七月十七日 左面） □（本カ）城□（氏カ）光直 内方		正面） □□（享保ヵ）［　］□（干カ）□ ［　］	正面）□□（享保ヵ）八癸卯天 上欠］〇〇信男 上欠］□（初ヵ）八日		基礎正面）明和五戊子　善 〇誉〇〇 尼 四月十七日 基礎左面） 〇〇氏	銘文
正面枠取り。銘は削られている。	立像。風化している。			正面枠取り	立像か？風化が激しい。	正面枠取り。下部に陰刻の蓮華文。側面下部が厚くなる。	幅が上に広がり羽子板状になっている。正面は枠取りあったが、欠損。下部は欠損。付近に蓮弁を持つ墓標下部の破片があり、同一個体の可能性がある。	伏鉢上には請花がない	坐像。頭部欠損。	備考
		1855		1714			1723		1768	西暦

										挿図番号
111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	報告番号
円頂方形墓標	石殿（屋根）	不明墓標	円頂方形墓標	組合せ宝篋印塔（塔身）	一石五輪塔	円頂方柱墓標	石殿（屋根）	石殿（屋根・扉・底板）	不明墓標	種別
51.5	15.5	(29.5)	(26)	16	58	35.5	23	20＋32.5＋8	(10)	高さ
23	43	25	25	18	15	20.5	43	44.5×37.5/24/39	26.5	最大幅
正面）□□（享保ヵ）九辰 □〇禅定門 □月十四日 左面）俗名長兵衛		正面）（上欠）］□□□□	正面）新歸眞［（下欠）	梵字もしくは特殊字体の漢字1文字	正面）□（為ヵ）〇〇童子　菩提也 左面）〇〇□良□　子 裏面）于（時ヵ）元禄四　□（長ヵ） 辛未正月八日	正面）釋〇〇 右面）延享二乙丑天 左面）八月十八日 裏面）〇〇氏				銘文
正面枠取り。下部に陰刻の蓮華文。	大部分は欠損	上部欠損。108と同一個体かもしれない。正面枠取り、下部陽刻の蓮華文。ほぞあり。	正面枠取り。下部欠損。109と同一個体かもしれない。		風輪に「大」、火輪に「本」空輪・水輪は欠損のため文字が見えない。地輪は風化のため判読できない。			扉板は2枚で、屋根と底板それぞれに2か所の扉の軸受け穴が穿たれており、扉は観音開きになる。底板には側板を受けるための溝がコの字状に彫られている。	下部に陽刻の蓮華文	備考
1724					1691	1745				西暦

挿図番号	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80
報告番号	笠付方柱墓標	円頂方形墓標	位牌形墓標	無縫塔（塔身・基礎）	円頂方形墓標	地蔵	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	一石宝篋印塔	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵
種別	笠付方柱墓標	円頂方形墓標	位牌形墓標	無縫塔（塔身・基礎）	円頂方形墓標	地蔵	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	一石宝篋印塔	地蔵	地蔵	地蔵	地蔵
高さ	50	54	45	36.5＋15.5	30	(25)	31	40	80	(21.5)	(33.5)	(27)	(16.5)
最大幅	26.5	21	17.5	18/22	14	22.5	17.5	18	23	24	21.5	26	24
銘文	正面）［　　］ 右面）［　　］ 左面）［　　］	正面）［　　］ 右面）寛政十戊午 ［　　］日 左面）俗名〇〇小次郎 若口立之	正面）〇〇［　　］信士 右面）寛延四辛未 左面）三月二十日	基礎正面）享保十六亥 上座 〇〇〇〇 品位 九月廿八日	正面）［　　］信士			正面）［　　］〇口信士 右面）享保廿一天 左面）四月十五日	正面）［　　］ 上欠］口生信士				
備考	笠と塔身が一石作りのもの。底部の内側は凹状に大きくえぐられている。	正面と左側の一部を削る。台座は2段。	下部に陰刻の蓮華文。正面枠取り。ほぞあり。	この下に水入れ付きの台座2段伴う。	ほぞあり。正面枠取り。	立像	正面枠取り	正面枠取り、下部に陰刻の蓮華文。ほぞあり。	塔身に梵字キリーク	立像	立像	立像	立像
西暦		1798	1751	1731				1736					

挿図番号	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91
報告番号	地蔵	観音	地蔵	地蔵（基礎）	観音	観音（像・基礎）	地蔵（像・基礎）	無縫塔（塔身・基礎）	地蔵（基礎）	無縫塔	地蔵（像）
種別	地蔵	観音	地蔵	地蔵（基礎）	観音	観音（像・基礎）	地蔵（像・基礎）	無縫塔（塔身・基礎）	地蔵（基礎）	無縫塔	地蔵（像）
高さ	29.5	(31.5)	(38)	17	30	(39)＋25.5	(21)＋21	48+23	(26)＋29.5	46	29.5
最大幅	18.5	31.5	23	21.5	26	34/31.5	23.5/24.5	23.5/25	24/31	22	31
銘文			基礎正面）宝暦十一巳天 〇〇童子 十一月廿八日	正面）天明二壬寅 〇〇孩児 七月廿日		基礎正面）口（天ヵ）明二壬寅 信 〇〇〇〇 女 七月廿日	基礎正面）口（寛ヵ）政三辛亥 〇〇童子 八月六日	基礎正面）享保十五戌天 〇〇〇〇居士 十月二日	正面）享保十九寅天 梵字ア　〇〇〇〇信士霊 八月十九日 左面）〇〇氏	正面） 〇　元文元丙辰天 〇口口口沙彌品位 ［　］二十口口	
備考	半跏坐像	頭部欠損。右ひざを立てた坐像。	頭部欠損。基礎と一体に造られた坐像。		坐像。体部に別作りの頭部をはめ込むためのほぞ孔が穿たれているが、頭部は見当たらない。	右ひざを立てた坐像。	坐像。肩から上は欠損。	基礎の上に反花を持つ。	91と組み合わさる。	水入れのある台座（高14㎝×幅36㎝）と組み合わさる。	89と組み合わさる。坐像。頭部は欠損。
西暦			1761	1782		1782	1791	1730	1734	1736	

									挿図番号
57	56	55	54	53	52	51	50	49	報告番号
円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	種別
41	33	36	34	37	37	42	48	38	高さ
20	17	18	18	18.5	18	19	19	18	最大幅
正面）［　］〇〇信女 右面）文化［　］童子 左面）九月六日　俗名ヲシマ ［　］〇〇口三［　］	正面）釈〇〇 右面）文政十二丑 十月廿三日 左面）〇〇氏 俗名徳之助	正面）釈〇〇 右面）寛政八辰天 左面）十二月四日	正面）釈〇〇霊 右面）享和二戌天 左面）六月六日 俗名甚蔵	正面）釈尼〇〇 右面）口口（文政ヵ）七申 十二月八日 左面）世名ヲツ子 〇〇為治郎立之	正面）釈〇〇 右面）天保六乙未 十二月四日 左面）俗名〇〇房右ヱ門 施主ヲコス	正面）釋〇〇信士 右面）文化五辰七月十七日 左面）榮蔵 〇〇房吉立之	正面）［　］ 右面）口口四未天 左面）六月十七日	正面）上欠］口子 右面）宝暦五口（乙ヵ）亥　十一月 廿五日 左面）光林長子	銘文
	台座1段に乗る	台座1段に乗る	台座1段に乗る	台座2段に乗る	台座2段に乗る	台座2段に乗る	正面全面が削られている ほぞがつく 台座2段あり	正面上方削られている	備考
	1829	1796	1802	1824	1835	1808	1755	1755	西暦

									挿図番号
67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	報告番号
位牌形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	地蔵（像・基礎）	種別
60	47	36	47	34.5	36	36	32	39	48＋28	高さ
23	18	22	21	17	18	18	17	29	28/26	最大幅
正面）［　］口（信ヵ）士 右面）口保［　］ 左面）四月二十六日	正面）［　］信士 右面）宝暦二口（壬ヵ）甲天 左面）十二月晦日	正面）口（釋ヵ）尼〇口 右面）寛延四辛未天 左面）閏六月八日	正面）〇〇〇〇信士 右面）弘化四年未 十一月廿四日 左面）俗名〇〇文右ヱ門 同苗清市立之	正面）釈〇〇 右面）嘉永四亥 二月廿一日 左面）〇〇茂左ヱ門ㇾ 行年五十一才	正面）釈〇〇 右面）慶應元丑 八月十二日 左面）〇〇幸左ヱ門ㇾ 行年四十三才	正面）釈〇〇 右面）嘉永七寅 七月十一日 左面）金三郎妻 ヲツ子ㇾ三十四才 〇〇重太郎母	正面）釈〇〇 右面）天保二卯十月十八日 左面）堅治子　浦太郎ㇾ	正面）〇〇童女 右面）天明七丁未 左面）正月七日	基礎正面）延享四卯天 〇〇〇〇童子 九月十一日	銘文
ほぞを持つ。正面、右面削られる。	ほぞを持つ。台座2段。正面は下方を除いて削られている。	台座に乗る	下部に陰刻の蓮華文	下部に陰刻の蓮華文					坐像	備考
	1752	1751	1847	1851	1865	1854	1831	1787	1747	西暦

										挿図番号
41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	報告番号
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	灯籠	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方柱墓標	平頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	種別
36	48	118	55	55	60	66	56	55	55	高さ
18	22	45	24	24	22	30	22	24	24.5	最大幅
正面）釋〇〇口子 右面）文化二口口 左面）〇〇儀重子　六月十一日 俗名賢次二才	正面）釋口口信女 右面）文化元甲子 十二月十二日 左面）〇〇儀重妻　俗名ヨリ		正面）〇〇〇〇大姉 右面）弘化二巳年 四月十三日 左面）光利口（妻ヵ）	正面）〇〇神霊墓 右面）弘化四未年　本城光利子 十月五日 左面）（和歌）	正面）［　　］ 右面）天明三口卯 二月二十日 左面）俗名　〇〇吉四良		正面）口〇〇〇信女 右面）文化五戊辰 五月十九日 左面）俗名　〇〇半口 ［　］立之	正面）花實蓮生信女 右面）天保口年二月廿六日 本城マツ墓 左面）（和歌）	正面）〇〇〇〇神士 右面）安政五戊午年 二月十八日 左面）本城光説墓	銘文
										備考
1805	1804		1845	1847	1783	1927	1808		1858	西暦

							挿図番号
48	47	46	45	44	43	42	報告番号
円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	種別
33	32	42	36	38	38	46	高さ
17	17	21	18	21	18	21	最大幅
正面）釋〇〇 右面）文政七申 十二月十二日 左面） 菊次郎一才 〇〇為次郎立之	正面）釈〇〇 右面）嘉永元申 正月廿七日 左面）世名　松太郎二才 〇〇為次郎立之	正面）明和六　十月廿日 〇〇 釋 〇〇　天明八　十月廿一日 右面）天明五　六月十八日 釋〇〇　ツロ 〇〇　フテ 文化十一　九月四日 文政五　十一月十八日 左面） 釋〇〇　礒吉 〇〇堅治郎立之	正面）釋〇〇 右面）嘉永元申 二月十四日 左面）俗名ユキ 年七十三才 〇〇為治郎 立之	正面）釈尼〇〇信女 右面）文政六癸未 十一月廿七日 左面）俗名ワキ 施主〇〇房右之門	正面）釈〇〇 右面）文政六未年 十二月廿三日 左面）俗名　八木吉 施主　〇〇氏	正面）〇〇〇〇神士 右面）寛政十一未年 六月十八日光林 左面）［　］	銘文
							備考
1824	1848	1822/1769/1788/1785/1814	1848	1823	1823	1799	西暦

								挿図番号
21	20	19	18	17	16	15	14	報告番号
円頂方柱墓標	一石五輪塔	平頂方柱墓標	平頂方柱墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	種別
37		72	61	61	62	61	54	高さ
20		30.5	24.7	24.5	24.5	18	25	最大幅
正面）〇〇童子 右面）文政八酉 十月六日 左面）冨之丁		正面）本城光基老翁之霊 右面）大正四年二月廿四日 左面）享年七十七才 本城デン建立		正面）〇〇〇〇信士 右面）天保六乙未八月七日 左面）俗名〇〇吉蔵 〇〇長治郎立之	正面）〇〇〇〇信女 右面）天保九戌年 閏四月廿二日 左面）俗名ヲハツ 施主〇〇長治郎	正面）〇〇〇〇信士霊位 右面）文政十丁亥 九月五日 左面）俗名〇〇与平治 同苗吉蔵立之	正面）〇口口〇神士 右面）嘉永元口歳　九月八日 本城光利墓　光利 左面）我霊は今よりこゝに あらかねの土諸ともに うロ（こヵ）きやハせぬ	銘文
	先祖代々の供養塔 花崗岩							備考
1825	1991	1915	1956	1835	1838	1827	1850	西暦

										挿図番号
31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	報告番号
円頂方形墓標	円頂方形墓標	尖頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方柱墓標	円頂方形墓標	位牌形墓標	円頂方形墓標	円頂方形墓標	種別
58.5	40	45	49	48	39	40	50	39	32	高さ
36	20	21	19	21	18	20	32	18	16.5	最大幅
正面）〇〇〇〇社士 右面）〇〇〇〇信女 天保十一年子正月十三日 本城光忠墓 左面）文政十亥年十月朔日	正面）〇〇童子 右面）文政十二年丑十月十二日 左面）口右口門	正面）宣教師本城光知墓 右面）明治十九年五月三日卒 左面）本城光基長男	正面）［　　］ 右面）口政四年 左面）口（施ヵ）主〇〇初治郎	正面）本城婦手女墓 右面）維于口明治十三年 辰五月廿二日 左面）本城光基妻	正面）［　　］ 右面）宝暦六子正月七日 左面）光口口口	正面）〇〇口口信女 右面）文政十二年丑十一月二日 左面）ヲサカ		正面）〇〇口〇仏男 右面）宝暦十庚辰天 左面）口月十日 俗名　福松	正面）〇〇孩女 右面）天保十亥 十一月十九日 左面）〇〇長治良子	銘文
			正面削られている		正面削られている	2字削られている				備考
1827/1840	1829	1886		1880	1756	1829		1760	1839	西暦

妙本寺上墓地G地点の石造物

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
	1	不明墓標	—	23		下部1／3残存	
	2	位牌形墓標	—	30		上部2／3残存	
	3	円頂方形墓標	37.5	20	正面）〇〇童子 右面）文政六未 左面）二月廿九日 房吉┐		1823
	4	円頂方形墓標	35	28.5			1928

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
	175	一石宝篋印塔				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	
	176	一石宝篋印塔				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	
	177	一石五輪塔				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	
	178	一石五輪塔				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	
	179	組合せ宝篋印塔（相輪）				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	
	180	組合せ宝篋印塔（相輪）				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	
	181	組合せ宝篋印塔（相輪）				埋没しているため、全体の規模・形状は不明	

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
	5	円頂方形墓標	38.5	24	正面）［　　］ 右面）寛保四甲子天 左面）正月十八日	正面、銘が削られている	1744
	6	円頂方形墓標	50	22	正面）〇〇口〇神士 右面）文化八未歳 左面）六月廿五日		1811
	7	円頂方形墓標	43	20	正面）〇〇口口神女 右面）安政三辰年八月十九日 左面）本城光説娘 ヲタ口才		1856
	8	円頂方形墓標	47	21	正面）〇［　］女 右面）嘉永四亥二月廿日 左面）〇〇七三郎妻 俗名ウメ┐		1851
	9	円頂方柱墓標	51	22			1936
	10	円頂方形墓標	55	18	正面）［　　］ 右面）文化口口口 左面）七月十三日 本城采女妻	正面の銘、削られている。年号も削られて不明。	
	11	円頂方形墓標	55	19.5	正面）口〇口口〇信女霊 右面）寛政三口年亥 十二月口口（朔日カ） 左面）俗名ヲシナ 出生口口村口田 施主〇〇茂右衛門		1791
	12	円頂方形墓標	56	23	正面）梵字キリーク［　］ 右面）寛政四年壬子 閏二月廿五日 左面）俗口　〇〇茂右衛門	正面の戒名、削られている。	1792
	13	円頂方柱墓標	56	24.5	正面）［　　］ 右面）延享三口口 左面）七月二十［　］ 本城光口母	正面の銘は削られている。	1746

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
10	155	一石宝篋印塔	(58.5)	20		相輪欠損 ※番号要確認154と逆ではないか？	
	156	組合せ宝篋印塔（笠）	(18.5)	(36)		隅飾り端部を欠く。軒下欠損。	
11	157	組合せ宝篋印塔（相輪）	67.5	25.5		九輪に5条の沈線が巡る。宝珠下部には主弁6・間弁6の請花、九輪下部には主弁5・間弁5の請花を持つ。	
16	158	地蔵	(45)	(26.5)	○口童子 享保口　正月廿二日	立像。蓮華座と光背を持つ。顔と光背上部は欠損。	1716～1736
12	159	組合せ宝篋印塔（相輪）	66	22		ほぞ径13・5㎝、長さ5・5㎝	
14	160	組合せ宝篋印塔（笠）	23	(34)		ほぞ穴径12・5㎝、深さ5・5㎝	
10	161	一石宝篋印塔	(61.5)	(23.5)	風　火　水　地 基礎正面）［　］施主 口○童女霊位 三月十日　敬白	九輪以上欠損。	
10	162	一石宝篋印塔	(91.5)	25		相輪先端少し欠損	
10	163	一石宝篋印塔	(61)	(27)		九輪以上欠損	
10	164	一石五輪塔	70	20.5	正面）［　　］信士		
10	165	一石宝篋印塔	(67.5)	31.5		九輪以上欠損	
10	166	一石宝篋印塔	(62)	(23.5)	元禄十丁丑天 ○誉○口信士 十月十八日	九輪以上欠損。相輪・笠・塔身に梵字ラ・バ・アが刻まれる。	1697

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
	167	円頂方柱墓標	35	21	正面）口（釋ヵ）○口信士 右面）口○信女 左面）享保九辰九月廿日 享保九辰九月廿三日	正面中央が彫りくぼめられ、枠取りされている。	1724
	168	位牌形墓標	54.5	32	正面）［　　］ 右面）享保十四酉天 左面）八月十九日	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面は下部が厚く作られている。戒名は削られている。	1729
	169	円頂方形墓標	36	20.5	（上欠）］口口 口（釋ヵ）［　］霊 十一月廿二日	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りしている。ほぞあり。戒名は削られている。	
	170	円頂方形墓標	45.5	19.5	正面）○○法子 右面）明和八卯 七月廿五日 左面）大森宮ノ下 六平事	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面下部は少し厚く作られている。	1771
	171	円頂方形墓標	51.5	21	正面）［　　］ 右面）享保二十天 左面）三月十日	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面下部は少し厚く作られている。	1735
10	172	一石宝篋印塔	(54.5)	(21.5)	塔身）梵字ア 基礎）［　］口（天ヵ） ○誉口口信士 口月七日	九輪以上欠損	
	173	円頂方形墓標	51	22	正面）○［　　］ 右面）享保九辰天 左面）十月二日	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面下部は厚く作られている。戒名は削られている。	1724
	174	位牌形墓標	52	36	正面）［　　］ 右面）宝暦六子ノ六月十七日 左面）俗名 ○○弥左ヱ門	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面下部は少し厚く作られている。戒名は削られている。	1756

														挿図番号
		16	12		12	10		16	14	10	14	14		
143	142	141	140	139	138	137	136	135	134	133	132	131		報告番号
一石五輪塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（相輪・笠）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（塔身・基礎）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（笠）		種別
(28.5)	(37.5)	25	(21)＋23	(27.5)	(58)	(96)	(13)	25	17.5＋25.5	(63)	22	22		高さ
(17)	(19.5)	30	20/35	(16.5)	18	25	46.5	25.5	19/27	(23)	34	36.5		最大幅
（梵字）キャ カ		為 正保三天 〇誉〇〇霊 □□（十二ヵ）月十日				［　　］施主 ［　　］信士 敬白 二月廿三日				為 慶長拾三年 □□（施主ヵ） 〇誉〇〇禅門 敬白 二月廿五日		火		銘文
空風輪のみ	伏鉢以下欠損	塔身受部21㎝四方	相輪は九輪上半部から欠損。九輪下部に請花を持たない。	九輪下半以下欠損	九輪下部に請花を持たない。ほぞ径12㎝、長さ4・5㎝。		下部欠損。ほぞ穴21㎝、深さ7㎝。	塔身受部19㎝	128・132とセットか。	九輪以上欠損。塔身に〇囲みの中に梵字キリーク。	128とセットか。ほぞ穴径13㎝、深さ5・5㎝。	129とセットか。		備考
		1646								1608				西暦

													挿図番号
			10	14	16	15		16	14	14			
154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144			報告番号
一石宝篋印塔	位牌形墓標	円頂方形墓標	一石五輪塔	組合せ宝篋印塔（塔身）	光背形墓標	組合せ宝篋印塔（基礎）	一石宝篋印塔	光背形墓標	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（塔身）			種別
(36)	55.5	52.5	(85.5)	19	(79.5)	37	(22.5)	75.5	21.5	17.5			高さ
(24)	(30.5)	22	23	19	27	40	25	26	37	19			最大幅
	梵字キリーク 享保十六辛亥天 釋□〇〇信女霊 七月六日	正面）〇［　］信女 右面）寛保三亥天 左面）六月二日				正面）〇譽□□禅士 背面）杁谷殿		慶長十四年己酉天 施主 □誉〇□菩提也 敬白 十一月十日	火				銘文
相輪・基礎欠損	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面は下部が厚く作られている。	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に陰刻の蓮華文を持つ。ほぞあり。側面は下部が厚く作られている。戒名の一部が削られている。			正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に蓮弁を持つ。ほぞあり。側面は下部が厚く作られている。正面の墓碑銘は削られている。	塔身受部30㎝	基礎のみ残存。下端も欠損。	正面は中央を彫りくぼめて、枠取りし、下部に蓮弁を持つ。ほぞあり。側面は下部が厚く作られている。	ほぞ穴径16㎝、深さ8㎝。					備考
	1731	1743						1609					西暦

	9	11	13	15	11	13	14	16	9	9	12	挿図番号
117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	報告番号
組合せ宝篋印塔（相輪）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（相輪）	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（基礎）	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	種別
(21.5)	96.5	(82.5)	(31)	42.5	(83.5)	28	20	22.5	(47.5)	(62.5)	46.5	高さ
28	(26)	29	(54.5)	42	28	46	36	25	19	28	17	最大幅
	［　］拾三年 敬 ［　］信士 白 ［　］			為 寛永□□（十八カ）年 □□□施主 □誉〇〇信士 □□□敬白 □□□日			火	□□（寛永カ）二季 施主 早世〇〇幽位 敬白 八月五日	為 慶長拾四年 □誉〇〇尼 ［　］月［　］日			銘文
伏鉢のみ	塔身、〇の中に梵字キリーク。	先端少し欠損。ほぞ径19㎝、長さ7・5㎝。	ほぞ穴径19㎝、10・5㎝。	塔身受部30㎝	先端少し欠損。ほぞ径15㎝、長さ6・5㎝。	ほぞ穴径18㎝、深さ9・5㎝。	請花の輪郭線が二重。109と同一石塔か。ほぞ穴径14㎝、深さ7㎝。	塔身受部18㎝。反花の輪郭線が二重。110（笠）と同一の石塔か。		九輪以上欠損	九輪下部に請花を持たない。	備考
				1641				1625	1609			西暦

10	12	12	9	14	15	13	10		12	14	14	14	挿図番号
130	129	128	127	126	125	124	123	122	121	120	119	118	報告番号
一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	組合せ宝篋印塔（相輪）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（基礎・台座）	組合せ宝篋印塔（笠）	一石五輪塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪・笠）	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（塔身）	種別
(88.5)	(48)	(53)	(90)	(22)	42＋10	35	77.5	(31.5)	(42.5)＋22	18.5	(26)	18	高さ
(25.5)	18	18	(25)	28	43/59	(52)	16.5	20	17/35	19	29	19	最大幅
逆修　〇誉〇〇　尼　禅	空 風				□（施カ）主 □（寛カ）永十三年 □□（随カ）法□ 〇誉〇〇禅定門 入法衆□ 五月□□ □□（敬白カ）			（上欠）］年 （上欠）］童子霊位 （上欠）］月十二日敬白	相輪）空　風 笠）火	〇の中に判読不明の字		〇の中に梵字	銘文
基礎の反花と相輪下部の請花は二重の輪郭線を持つ。	九輪に「空」、伏鉢に「風」。131とセット。	先端少し欠損。九輪下部には請花を持たない。ほぞ径12㎝、長さ4㎝。	相輪先端と隅飾り少し欠損		塔身受部31㎝四方	ほぞ穴24㎝、径8㎝。	完形	塔身以上欠損	「空」、「風」、「火」				備考
					1636								西暦

挿図番号	9	15	13	14	15	16		11	16		9	挿図番号
報告番号	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	報告番号
種別	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（基礎）	石殿	組合せ宝篋印塔（相輪）	不明部材（台座？）	組合せ宝篋印塔（笠）	一石宝篋印塔	種別
高さ	(64)	(26.5)	35	27	31.5	28		(72.5)	37	(20)	(72.5)	高さ
最大幅	27	42	55	29	37	29.5		26	(62.5)	47.5	(17)	最大幅
銘文	寛永二年　信 為　〇誉〇〇　女 八月十八日			水	慶長拾四年　施主 〇譽〇〇信士　霊 三月十二日　敬白　位	「　　」 「　」女霊位 卯月十三日　敬白　施主					慶長拾五年　施主 〇誉〇〇霊位 五月十八日　敬白	銘文
備考	九輪以上欠損	下部欠損。塔身受部30・5㎝。	下面32・5㎝、下面の穴24㎝。天側は埋没しているため観察できず。	「水」は輪郭線を持つ。	「地」	塔身受部20㎝。	溝状の彫込。基底部もしくは壁部材か？	ほぞ（径18㎝、長さ7・5㎝）	上部に半球形の突出部。下部は台状を呈し、内側が抉られている。	上半欠損。下面30㎝。		備考
西暦	1625				1609						1610	西暦

挿図番号	9	14	11	16	16	9		15	14	9	15		挿図番号
報告番号	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	報告番号
種別	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（相輪）	無縫塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（基礎）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（台座）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（笠）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（相輪）	種別
高さ	(90)	15	80	55	25.5	93.5	12	41	20.5	(78.5)	37.5	(26)	高さ
最大幅	28	16.5	27	20	30	26	63	43	36	23	43	15.5	最大幅
銘文	正保三年 為　□□禅尼□　敬 七月十二日　白					慶長拾□（二カ）年 □□禅尼 □月□日　為					慶長拾二年 地 〇□（譽カ）□□信士　霊 三月六日　位 敬白　施主		銘文
備考	伏鉢欠損。九輪下部には請花なし。		ほぞ径18㎝、長さ6・5㎝	ほぞ径11㎝、長さ5㎝	塔身受部21・5㎝		基礎受部47㎝。外周に蓮弁。	塔身受部30㎝。	ほぞ穴径12㎝、深さ7㎝		「地」は輪郭線を持つ。塔身受部32㎝。	九輪下半以下は欠損のため、一石宝篋印塔の可能性もある。宝珠下部に請花あり。	備考
西暦	1646					1607					1607		西暦

	14	8	8	14	10		11	14			15	挿図番号
67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	報告番号
組合せ宝篋印塔（台座）	組合せ宝篋印塔（塔身）	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（塔身）	一石五輪塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（基礎）	組合せ宝篋印塔（基礎）	種別
8.5	(21)	(44.5)	83	16	(47.0)	(64)	(77)	23	(18.5)	(22)	39.5	高さ
55.5	28	21	24	17	18.5	26.5	26.5	24.5	36.5	36.5	43	最大幅
		慶長四口（年カ） 口（施カ）主 為　口〇童子 敬白 九月八日	元和三年 〇口〇〇　施主 信 男 敬白 口月七日		慶長十九年 口〇童女霊位　施主 敬白 三月廿日	（相輪）空 笠）風・火				（上欠）」誉妙「　」信女　施主 敬白 七月十一日	慶口（長カ）拾五年　施主 〇譽口口禅定門 三月十口「（下欠）	銘文
基礎受部39㎝四方		相輪欠損	相輪に「真」、笠に「如」、基礎に「大」		空風輪欠損。地輪に「地」	塔身中程から下、欠損	ほぞ径17㎝、高さ10㎝。					備考
		1599	1617		1614						1610	西暦

16	13		12	9	9	13	9	14	13	8	11	11	挿図番号
80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	報告番号
組合せ宝篋印塔（台座）	組合せ宝篋印塔（笠）	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（相輪）	一石宝篋印塔	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（笠）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（塔身）	組合せ宝篋印塔（笠）	一石宝篋印塔	組合せ宝篋印塔（相輪）	組合せ宝篋印塔（相輪）	種別
9.5	38.5	(21)	(68.5)	(63.5)	(72)	31.5	86	28.5	(31)	95	(70)	(77.5)	高さ
66	56	28.5	23	26	(20)	(48)	(27.5)	28.5	54	(27)	26	29	最大幅
				塔身）為 基礎） 卯年 〇口（誉カ）〇〇口（禅カ）尼 七月廿五日	元禄十口（丑カ）天 〇誉〇口信士 九月七日					元和七口口（辛酉カ） 為 口〇〇〇女　敬 白 七月朔日	空 風		銘文
基礎受部46㎝	ほぞ穴径21㎝、深さ11・5㎝	上下欠損	ほぞ径16㎝、長さ6㎝	九輪以上欠損	相輪から塔身にかけて梵字キャ・カ・ラ・バ・ア	ほぞ穴径18・5㎝、深さ8・5㎝			ほぞ穴径23㎝、深さ10㎝		九輪に「空」、伏鉢に「風」（どちらも輪郭線を持つ）。ほぞ径17㎝、長さ12㎝。	先端少し欠損。ほぞ径18・5㎝、長さ8㎝。	備考
					1697					1621			西暦

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
8	40	一石宝篋印塔	(64.0)	(26.0)	基礎正面）［　］ ［　］ ［　］日	九輪以上欠損。相輪の請花に「風」、笠に「火」	
16	39	無縫塔（塔身・基礎）	58+35	28/34.5	基礎正面）慶長十九年 （上欠）〇〇大徳覺位 霜月十日	塔身は直径の2／5欠損	1614
	38	一石宝篋印塔	(30)	(13)		相輪上部のみ	
8	37	一石宝篋印塔	(99.0)	30	元和三口丁 ［　］施主 ［　］信士 敬白 口（九カ）月口（五カ）日		1617
15	36	組合せ宝篋印塔（基礎）	(22)	36		塔身受部26㎝四方	
	35	組合せ宝篋印塔（笠）	(19)	46		下部欠損。ほぞ穴径18㎝、深さ11㎝。	
12	34	組合せ宝篋印塔（相輪）	(45.5)	19.5		先端欠。九輪下部に請花を持たないもの。	
10	33	一石五輪塔	(35)	18	口口（長カ）十九年 施主 地［　］信女霊位 敬白 ［　］廿七日	空風輪・火輪欠損	1614
13	32	組合せ宝篋印塔（笠）	27	46.5		ほぞ穴径20㎝、深さ11㎝	
12	31	組合せ宝篋印塔（相輪）	(51)	22	空 風	九輪に「空」、伏鉢に「風」。九輪下部に請花を持たない。ほぞ径14㎝、長さ8㎝。	
8	30	一石宝篋印塔	(65.0)	26.5		九輪以上欠損。笠上段に「風」、笠下段に「火」	
12	29	組合せ宝篋印塔（相輪）	54.5	20		ほぞ径12㎝、長さ4・5㎝。	
14	28	組合せ宝篋印塔（笠）	20.5	33.5		ほぞ穴径12㎝、深さ6㎝。軒下に請花を持たないもの。	

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
15	55	組合せ宝篋印塔（基礎）	40	43		塔身受部30㎝四方	
12	54	組合せ宝篋印塔（相輪）	(59)	24.5	空、 風	ほぞ径16・5㎝、長さ9・5㎝。九輪に「空」、伏鉢に「風」。	
14	53	組合せ宝篋印塔（塔身）	(16.5)	20.5		下部欠損	
	52	組合せ宝篋印塔（相輪）	(25)	20		伏鉢のみ	
12	51	組合せ宝篋印塔（相輪）	(64.5)	(24.3)		先端少し欠損。ほぞ径16㎝、長さ7㎝以上	
16	50	組合せ宝篋印塔（台座）	8	60.5		基礎受部45㎝四方	
14	49	組合せ宝篋印塔（笠）	22	35.5		軒下に請花を持たない。ほぞ穴径14㎝、深さ8㎝。	
16	48	組合せ宝篋印塔（台座）	8.5	53.5		外周に蓮弁を配する。基礎受部39㎝四方。	
	47	一石五輪塔	(47)	17		空風輪欠損	
	46	組合せ宝篋印塔（笠）	(18.0)	(44.0)	火	隅飾りから上は欠損。「火」	
13	45	組合せ宝篋印塔（笠）	37	56	火	69と組み合う。「火」の字は輪郭線を持つ。ほぞ穴径21㎝、深さ14・5㎝。	
	44	一石宝篋印塔	(24.0)	(20.0)		基礎のみ、塔身以上欠損	
14	43	組合せ宝篋印塔（笠）	18.5	30		軒下に請花を持たない。ほぞ穴径12㎝、深さ6㎝	
13	42	組合せ宝篋印塔（笠）	29	45	火		
13	41	組合せ宝篋印塔（笠）	(25.0)	46.5		下部欠損。ほぞ穴（径20㎝、深さ10㎝）	

第3表　石造物一覧表
妙本寺上墓地E地点の石造物

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
11	1	組合せ宝篋印塔（相輪）	(75)	28.5		ほぞ18・5㎝、長さ10・5㎝	
8	2	一石宝篋印塔	94.5	27.5		宝珠下部と九輪基部に請花	
14	3	組合せ宝篋印塔（塔身）	23.5	25			
16	4	組合せ宝篋印塔（台座）	11.5	55		基礎受部41・5㎝四方。外周に蓮弁。	
15	5	組合せ宝篋印塔（基礎）	(22.5)	37	地 慶長拾［（下欠） 〇〇［（下欠） 八月［（下欠）		1605～1614
	6	組合せ宝篋印塔（笠）	(14.5)	(32.5)		ほぞ穴13・5㎝、深さ5・5㎝。下部欠損。	
12	7	組合せ宝篋印塔（相輪）	(47.5)	18.5		宝珠下部に請花があり、伏鉢上には請花なし。ほぞ径12・5㎝、長さ6・5㎝。	
12	8	組合せ宝篋印塔（相輪）	(68.5)	24.5		先端少し欠損。ほぞ径16㎝、長さ5㎝。	
	9	一石宝篋印塔	(31.5)	(23.0)		相輪の九輪以上及び塔身下半以下欠損	
16	10	地蔵	49	26	（上欠）］伝 梵字カ 宝永七口（寅カ）二月十一日	立像	1710
10	11	一石五輪塔	(40.5)	18.5	梵字	地輪欠、火輪梵字	
15	12	組合せ宝篋印塔（基礎）	(27.5)	44	地 春［（下欠） ［（下欠） 口（八カ）月［（下欠）	塔身受部31㎝四方	

挿図番号	報告番号	種別	高さ	最大幅	銘文	備考	西暦
8	13	一石宝篋印塔	(98.5)	27	慶長［（下欠） 〇誉〇〇霊位 七月［（下欠）	基礎に「地」	1596～1615
12	14	組合せ宝篋印塔（相輪）	(61.5)	21.5		先端少し欠損。ほぞ穴径13㎝、高さ6・5㎝。	
14	15	組合せ宝篋印塔（塔身）	(20.5)	25	水		
15	16	組合せ宝篋印塔（基礎）	(25)	36.5	地 口口（元和カ）口［（下欠） 口誉［（下欠） 九月十日		1615～1624
8	17	一石宝篋印塔	(52.5)	20.5		九輪以上欠損	
10	18	一石五輪塔	(73.0)	20.5		火輪に梵字バ	
8	19	一石宝篋印塔	(60.5)	(28.0)		相輪欠損	
15	20	組合せ宝篋印塔（基礎）	(14)	28		下部は埋まっている	
13	21	組合せ宝篋印塔（笠）	28.5	46	火	「火」。ほぞ穴径18㎝。	
	22	組合せ宝篋印塔（笠）	(16)	(35.5)		上部欠損	
13	23	組合せ宝篋印塔（笠）	24.5	42		ほぞ穴径19㎝、深さ12・5㎝	
13	24	組合せ宝篋印塔（笠）	35.5	53.5			
	25	一石五輪塔	(32)	20.5		水輪上半以上欠。埋まっている。	
14	26	組合せ宝篋印塔（塔身）	22	22.5			
11	27	組合せ宝篋印塔（相輪）	54.5	25		九輪に「空」、伏鉢に「風」。ほぞ径16・5㎝、長さ9・5㎝。	

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわみぎんざんいせきせきぞうぶつちょうさほうこくしょ
書　　名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
副 書 名	昆布山谷地区　妙本寺上墓地Ｅ地点・Ｇ地点　虎岸寺跡の石造物調査
巻　　次	
シリーズ名	石見銀山遺跡石造物調査報告書
シリーズ番号	16
編 執 筆 者	東山信治
編 集 機 関	島根県教育委員会・大田市教育委員会
所 在 地	〒690-8502　島根県松江市殿町１番地　　TEL０852−22−5642 〒694-0064　島根県大田市大田町大田ロ1111番地　TEL０854−82−1600
発 行 機 関	島根県教育委員会
発 行 年 月	２０１６年３月
調 査 原 因	石見銀山遺跡総合調査

名　　称	所 在 地	主な時代	石　　造　　物
妙本寺上墓地 Ｅ　地　点	大田市大森町	安土桃山時代 ～ 江戸時代中期	一石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、無縫塔、光背形墓標、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、地蔵、石殿、用途不明石材
妙本寺上墓地 Ｇ　地　点	大田市大森町	江戸時代前期 ～ 近代	一石宝篋印塔、二石宝篋印塔、一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、組合せ五輪塔、無縫塔、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、笠付方柱墓標、尖頂方柱墓標、平頂方柱墓標、地蔵、観音、石殿、灯籠
虎 岸 寺 跡	大田市大森町	江戸時代中期 ～ 明治時代	一石五輪塔、組合せ宝篋印塔、位牌形墓標、円頂方形墓標、円頂方柱墓標、突頂方柱墓標、地蔵、観音

石見銀山遺跡石造物調査報告書16

＿ 昆布山谷地区　妙本寺上墓地Ｅ地点・G地点 ＿
虎岸寺跡の石造物調査

平成28（2016）年３月

編　集　島根県教育委員会／大田市教育委員会
松江市殿町１番地／大田市大田町大田ロ1111番地

発　行　島根県教育委員会
松江市殿町１番地

ＵＲＬ　http://www.pref.shimane.lg.jp/sekaiisan/iwami_ginzan/

印　刷　有限会社 松陽印刷所